
蝶姫

檸檬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蝶姫

【著者名】

N2963R

【作者名】

檸檬

【あらすじ】

桜花、海龍そして――蝶姫。

「お前が好きだ」×「大好きだよ」

叶わない。 そう言われ続けた恋。
儚く、 淡い物語り——

ドカツ！ バキツツ！

「弱い。この程度で私には勝てない」

またね。同じ事の繰り返し。

私に勝てる者なんて居ないから。

私の前には100人あまりの倒れた人達

全員武器を持つているのに対して

私は――――――素手。

私の名前は佐久間 慄さくまりん

高校生。

「お、お前つ . . . 何者だツ ! ! ?」

まだ喋れたんだ。
まあ、ヽヽねえ

「私？世間では . . . 蝶姫そう呼ばれてるけど

みるみるつづけて離れていく男。

「ちよ、蝶姫だとツ、、、、、」

馬鹿ね、、、、、、、。

「やつよ、じやあそろそろお別れね。

バイバイ、、、、、、、

ドスツ 、、、、、、、

「ぐはあツー！」

明日も、同じよね。

私は全国ノ。・1の桜花の総長であり、
伝説の蝶姫。

蝶姫は深夜10時に現れる。

桜花は決して無駄な争いはしない。
せこい手を使わない正統派の族。

最強の桜花とＺ．Ｚの海龍
出合つてはいけない2つが出合つ時
運命はどうなる――――?

「ただいま、 、 、
まあ、 誰も居るわけ無いよね」

携帯を開くと、 1件のメール。

「陸にい？ こんな時間に、 、 、
珍しいなあ、 」

陸には本名佐久間陸矢。
私のお兄ちゃん。

メールの内容は

（愛しの慷慨へ？

明日から三和高校に入学してね！）

はあ 、 、 、 シスコンやめて欲しいんだけど

返事はYESS。

明日から通えと言われた。
制服は既に届いていた、、、

さすが、ね桜花11代目総長 白豹。

明日から楽しみねえ、、、

——この時、懐は忘れていたのだ。

海龍の存在を——、

久し振りに胸を踊らせて、
眠りについた懐だった、、、

「ん、 、 、 、

朝、 、 、 ？ 今日から学校ね

クスッ、 、 、

まだ新しい制服を着て、
朝食を食べて、 、 、 、 、

そろそろ出ようかなあ

「君可愛いね～？ 今から学校？
サボつて俺と遊ばない？」

ハア、 、 、 これで6人目。
外に出たらこれだよ、 うざい。

全て無視して、 やつと三和高校に到着。

「理事長室 ． ． ． ． 何処かな？」

迷ったの誰かに聞いて見る事にした

「あの、理事長室どこですか？」

敬語を使って聞くと、

振り返ったその人は一瞬固まり

「あ、ああ理事長室か、

ここを真っ直ぐ行つて
右に曲がつたらすぐだよ」

丁寧に説明するんだね . . .
不良校だからといって
全員悪いわけじゃないからね。

「ありがとう」

にこりと作り笑いをすると、
その人には眉に皺を寄せて

「その笑い方やめる。

お前、転校生か名前なんだ？」

私の作り笑いに気づくなんて . . .
この人何者？

「人に名前を聞くなら自分から
名乗るべきでしょ？」

「そう言つと、瞳を見開き
驚いた顔をしていた。

「ククッ、、、俺を知らないのか。
そうだな、俺は柊煉」

「今日会つたばかりなんだから
知らないし、、、

「そう、、、私は佐久間凜よ、煉」

「急がなくちゃ、、、時間が無い

「じゃあ、行くから

「そう言つてから急いで理事長室に
向かつた。

「佐久間凜、 、 か

そんな事をつぶやいている事も知りず。

コンコン、 、 、

「失礼します。佐久間凜です」

そういう、 入ると

「り――んひやああん――」

ドスツ、 、 、

「ぐしお、 、 強ツ――」

そう抱きつこうとしてきたのは
陸にいたった。

つい殴ってしまった。

「陸にい? 何してるのかしら?」

にっこり笑うと引きつりながらも
わらわ陸こい。

「り、懼？怖いよ？

一応俺こここの理事長だからね？」

以外一陸にいが理事長とかね・・・

そんなやり取りをしていると

「「「失礼します」」」

誰かが入ってきた。

でも、聞き覚えのある声・・・?
この気配も知ってる。

その人達が入つて来ると
私はフリーズした

「來、柚木、優弥、冬夜?
なぜここに、 、 、 、 、 ？」

「 」 「 」 「 」 懼？ 「 」 「 」

おおー見事にハモった！

いやいややうじやなくてー

何故か桜花の幹部が全員いるのだ。

「陸に、説明してくれるよな？」

「う、こいつ黒い笑みを浮かべると、

「わ、分かつたー！ちょっと怖ッ！」

説明を受けたあと、しつかり

お仕置もしてから理事長室を出た。

「懼へどうすんの？

俺、はー一緒に行動するけど？」

来が言つ。

「そうね、私は別行動よ。

総長は男だと思われているし

バレると厄介だわ」

「え～、懐といられないの？」

まあ理由が仕方ないけど、

柚木は男なのに可愛いつ！

黒い時もあるけどね、

「「めんなさい、柚木。

ここには海龍が居るらしいの。

だからさらに厄介なのよ、

でももしもの時は駆けつけるから

海龍、厄介ねえ

関わら無いようにしなくちゃ

職員室へ行き、

「佐久間 慢です。」

「月島先生いらっしゃいますか？」

「この時私は忘れていたんだ。」

「月島」とこう答えた。

「慢さん！」

「なんでここに居るんですか？」

月島先生は私を見るなりそつと戻ってきた
小さな小さな声で、 、 、 、

「奏ね？ でもここはまずい

廊下に出よつ~。」

私も奏にだけ聞ひやうのよつと言つて、
廊下へでた。

「なんで口口に奏がいるの？」

まあ、私の担任が奏なのは、
陸にいがそつしたんだらうけどね」

冷静に私が言つと、奏が

「転校生が来るのは知つてたんですけど
まさか懔さんとは思いませんでした
陸矢もやつてくれますね

確かにそつね。

まんまと陸にいの眼に引っかかつたわ

「来達まで転校させて来たの。
全くなに考へてるのか、
まあ、既にお仕置は済んでるけど」

「そつそですか、教室行きましょう?
もうすぐHRですから。

穀さんは1-2です。

俺が呼んだら入つて来てください。

そんなに怖がらなくてもいいのにね？

奏は桜花11代目副総長。

ざやーざやーうるさい教室に奏が入つて行く

「うるせえー本齧鳴つただろー」

その一言で

シーン、 、 、 、

静まり返つた。

そんな怖かつたかしら?

「転入生だ。槻さん、入ってください」

その瞬間、

「野郎はいらぬー？」

「男はパシリだあー！女だせー？」

「うるせえッつひんだらうがー！」

ガララッ

「懔さん、自己紹介してください」

私は微笑む奏に応えるよつて
私も微笑みかえす。

「、、、、佐久間懔です」

名前だけ言い、
もういいでしょ、といつ視線を
奏に送る。

「、、、、それだけ？
ん、じゃあ席は窓際の1番後ろです

特等席

ま、当たり前ね。

「うわ、、、、」

「やべえつ

とか席へ行く途中で色々な反応をみた。

みんなどうしたの?
なんか変なのかな?

キーンゴーンカーン、、、、

「なあつ俺、
三島祥

つて言つんだー!よろしく、

「

前の席の男の子が喋り掛けてきた。

「ええ、よろしく。祥」

眠かったのでそれだけ言つて寝ようとする

「俺の事、知らねえのか？」

知つてる訳ないし、 、 、
始めて会つたんだから、 、 、 、

「その顔、知らねえんだな？」

「へえ、初めて会つたなこんな奴。
俺は、海龍の幹部なんだ」

海龍？

それはまずい 、 、 、 、 、 、 、
でもクラスメイト何だから仕方ないし

「そ、う、 、 、 私眠いの。 ほつといて？」

どうでもよかつたのをう言つと、

とても驚いた顔をしている祥がいた

「ほんと、 、 変わった女だな？」

大体の女は媚びて来るか、

怯えるかのどちらかなのに . . .
奏さん敬語だし “さん”付けだし

はあ？ 私が媚ひる？ 怯える？
ありえない。

桜花の現総長であり、蝶姫である私が？

「私は興味ない。」

眠いつて言つてゐでしょ？

悦くもなし

言い放ち、寝る態勢に入る。

なのに、

ぐいツ！

祥に腕を引っ張られ、立ち上がらされた

睨んでいうと、

「着いて来て。」

「一言言われたので
教室から出てこき、つこて行くと、

――― 屋上に着いた。

「みつんなー！面白いもの見つけたー！」

ぐこっと前に押し出された

「ちゅうと、祥！何するの！
私、物じやないし！」

クルツと祥の方を向いて言った。

「ヽヽヽヽヽ 懨？」

誰かに呼ばれて、ふりかえると

「煉？ねえ、祥どうにかしてよ

「眠いのに連れ出されて、 、 、

周りにいる知らない人たちが
驚いた顔で私をみている。

「煉にそんな風にいうなんて、 、 、

銀髪に青のメッシュの人がいう。

「ははっ！ ありえねえよ」 、「

今度は金髪。

「そうだな、 初めてだな
こんな人」

次は黒髪。

「・・・・・・・・

空色の髪の人は無言。

「ちょっと祥！ この人達誰？
まさか、 海龍の人？」

もしそうなら最悪、

「ああ、そうだよ。俺の仲間」

やつぱり、、、ありえない、、

「俺は前田千津

千津って呼んで！」

銀髪メッシュ。

「俺は、苑間諒

諒って呼んでね！」

金髪。可愛い系ね

「俺は、池波朱鳥

朱鳥でいい

黒髪。この人、デキるわ。

「・・・浅尾楷」

空色の髪。おそらく女嫌いね、、、

「私は佐久間煉よ」

大変な事になつた、、
海龍と思いつきり関わつてしまつた
陸にいと奏でもさすがに怒るつて！

「煉！私、帰るつ、、きやあつ！」

もへへへッ！何してくれんの？
これじやあ煉に抱きついてるみたいじやん

「離してよッ！煉！」

ぱたぱた煉の腕の中で暴れる。

「なあ煉、蝶姫か桜花の情報知らね？
なんでもいいからさ」

落ち着いた声でいきなり聞かれた

「・・・・なんですか？」

聞き返す

「桜花は敵だし、蝶姫は・・・・・・

俺らの憧れだから。

「捜してるんだ」

そうだった。桜花は海龍にとつて敵

だけど、蝶姫が、憧れの蝶姫が
桜花の総長と知つたら、どうするの?
貴方の腕の中に居る私と言つたら?

――― 放課後

早く桜花の倉庫へ行かないとい
おそらくあの人達が、 、 、 、 、

「りーん！帰ろっ！」

やつぱり、 煉達に言われてるんだ、 、

「いめんなさい。 今日は用事があるから

ううん、 本当は” 今日 ” じゃない。

” これから ” もずっと。

桜花と海龍は敵どじ。
関わってはいけないので、 、 、

「えー？ 僕等の倉庫行くんだ！
煉が連れて来いつて

煉はバカだよ、何も知らないんだから。

「無理なの。後、私にこれ以上
関わら無いほうがいいよ」

それに私が桜花の総長と知つたら、
敵視するんでしょう？

「おい、祥。さつさと凜連れて来い」

教室までズカズカ入つて来た煉達。
私の腕を引っ張つて行く。

「煉！用があるんだつてば！」

校門まで来た時、私が煉に言つと
煉が立ち止まる。

「じゃあ、お前誰？」

「朱鳥が調べても何の情報もあがらない」

「こんな事一度も無かつたと言つ煉。

まあ、当たり前ね。

私の情報は冬夜が完全にロックをしている

「そう、残念だったわね。」

煉の手を振り払つて歩く。

「私を調べても何もでない。

でるわけないじゃない。」

蝶姫の情報は陸にいに任せである。」

そんな独り言を言いながら、
帰つていつた。・・・・・・・・・・

あの後家へ帰つて着替える。
すぐに桜花の倉庫へ向かう

「來に連絡しなくちや、、、、」

電話を掛けると、1コールで出た。

『 懐か？何やつてんだよ！早く来い。
みんな心配してたんだぞ？』

やつぱり怒つてるかあ、、、、、
着いたらみつちり叱られちゃうよ、、、、

「分かつてゐる、心配してられてありがと。」
今すぐ向かつから

來達になら蝶姫の事言つてもいい。
今日。今日言わなくちや。
海龍に関わった以上隠し事はできない

桜花の倉庫に着いて
来に着いたとメールを打ち、
入ると

「うーーん！会いたかつたよーー！」

ぎゅうつ

「さやあツー柚木？危ないよ
飛びついたりすると ね？」

いきなり抱きついてきたのは柚木。

いつも甘えて来て、
可愛い物が好きな私は嫌じやない。

「だつてー学校でもしたかつたけど
懲を危険にさらしたくないから、
我慢してたんだよつ？」

ここにこ笑いながらこつ柚木。

「おーーい、またやつてんのか柚木。
みんな居るからこちでやりな？」

呆れ顔で言つて来る冬夜。

「はーいー行こう? 懃

私が領くと私の前を歩く柚木

「総長! 柚木さん! こんにちわ!」

まわりから聞こえる挨拶を
かえしながら進んでいった。

「來ー冬夜ー優弥ー学校ぶり?」

幹部室に入つて挨拶(?)を言つ。

私の席はなぜか当然の様に柚木の膝の上。

「ねえ、皆。大切な話が2つあるの

私の髪を撫でていた柚木の手も
2人でゲームしていた來と優弥の手も

パソコンをいじっていた冬夜の手も

止まつた。

「一つ目は私が海龍に関わってしまった事

まだ、何も知られていないみたい。

二つ目は私が海龍に関わってしまったから
言うの。いつか話そうと思っていたけど
アノ蝶姫は私。この事は陸にいしか知らない」

皆さん固まつちやつたね…………

ビハシよ…………

「柚木つ來つ冬夜つ優弥あ！」

「固まつてないでなんか言つてよー。」

「いつまで固まつてんの？」

柚木も固まるなら離してからにしてよ

「蝶姫が……懊？」

「で、でも蝶姫は青い髪に青い瞳だ」

確かに私は髪も瞳も黒だけど……。

「あー……それは、んーつ

まあ、いつか！

実を言つとカツラです。

「本当の色が青。」

「はい！隠れ衝撃事実ー！」

いや、嘘です。忘れてた髪の色。

カラコンとカツラをとつて、

本当の色をだす。

「うわあっ…………！綺麗な青色だあー。」

柚木、苦しいです。窒息するつ！

「嘘、ごめんね？今まで言わなくて。
言いたくなかったわけじゃないの
きっと、言っても何も変わらないから
どっちでもいいかなって思つてて」

でも、どんな事でも隠しありや駄目だよね

「いや…………本気で吃驚したけど
懲りにとって俺らが隠し事したくない
つて思える存在になれてよかつたよ」

さすが來ねえつ！

どんなに子供っぽくても頬りになる。

「今まで…べ…ひ…ひ…か…」

もう、泣いちゃつたじゃん。
みんなが優しいから。
ココが暖かいから。

「 「 「 「 ああつ（うんつ） 一 「 「 「 「

それからみんなやりたい事やり始めた

柚木は私の青い髪を撫でながら私と話、
來と優弥はゲームをやって
冬夜はパソコンをいじっている。

いつもの光景。

少し違うのは私の髪が青い事。

----- ありがとう、みんな

「ねえ！ 懲はこれから俺らと一緒に居れない？」

可愛いよ。柚木は可愛いけど！

「それは無理だと思うよ。

海龍達はあなた達が幹部つて事を知ってる。
その中に総長と思われていらない私がいると
不自然すぎる。」「めんね

私もこの人達と一緒に居たい。
でも、出来ないよ ・・・

「じゃあ、もう総長だつて言つのは？
俺は懲が嫌じゃなければ言つてもいい

みんなに？ 総長つて事を？
そんな事考えた事なかつた ・・・

まさか冬夜が言つなんて . . .
一番反対しそうなのに。

「來も柚木も優弥もいいの?」

全國N.O.・1の總長が私つて知られても?
強さには自信がある。
でも、女なんだよ?

「「「 懐が決めるなら」」」

みんなが同意した今、決断するのは私。

「 私、皆と一緒に居たいな

もう、いいんじゃないかな?

転校早々ばれちゃうけど、不良校だし?

「ほんと? 懐と学校でも居れるの?」

ほり、

私の一言でこんなに喜んでくれる人がいる。

それだけで、幸せだよね？

「うん。陸にいにクラス替えてもういつ
誰と同じにしてよつかなあ？」

「あれ？ 言つてなかつた？」

俺ら全員同じクラスなんだよなー」

はー？ 聞いてないし！

「そり、よかつた！ 今日言つとく。

明日からなれるかもしれないね！」

満面の笑みで笑うと、

みんな顔があかくなつた。

「みんな顔赤いけど、風邪でもひいた？

「いつさないでよー？」

来達はおなじ事を考えていました。

(. ! ¥ ¥ ¥ ¥ ¥ ¥ 無自覚やべえ .)

「 まことに、おおきなおもてなし。
おまかせください。」

――佐久間宅で

「ただいま！陸にい、いるー？」

話すなら早い方がいいしね！

「懐！どうしたんだ？

俺とそんなに話したいのか！」

無駄な + 思考どうにかならない？

こっちが疲れる・・・

「お願いがあるんだけど・・・

私、海龍と関わっちゃったの。
来達と同じクラスにしてほしいなつて
少なからず安全だし・・・ダメ？」

うるうる瞳 + 上田遣いでお願いすれば
大体の男はきいてくれるって言われたし。

「（か、可愛いつー）分かった。」

やつたねー陸っこも当てはあるんだ

「陸っこありがと おやすみー」

明日から楽しみー！

——登校後

「黨一派はよーー！」

ଶ୍ରୀମଦ୍ଭଗବତ

「ゆ、柚木！苦しいよっ」

そして女子の皆様の視線が痛い。

「冬夜あつつ！助けてえ」

柚木を止めてくださいいい！

「柚木、惣が可哀想。離れる。」

魔王の顔をした神様がいる！

「はあーい・・・・

柚木は拗ねても可愛いよ
私も分けて欲しいなー・・・

(懐も十分可愛いよっ！ b y 作者)

「ありがとっ 冬夜」

にひとつと笑つてお礼を言つてから
用意された席に座る。

当たり前の様に、私の周りは来達。

担任まで奏になつてゐし・・・

「なんで奏さん着いてきてんだよー

ほーら、來も吃驚してゐるよー

「おい、來！俺の授業で喋るとは
いい度胸してゐるなあー！」

ありやー・・・

来達には怒るんだー・・・・・

仕方ない、助けてあげよつ。

「奏、私が來に喋りかけたの。

「めんなさい?」

奏が少し困った顔をしてから、

「そうですか、喋つたら駄目です」

私だけへの喋り方で話す。

「はい。氣をつけます」

授業が再開された。

「はあー・・・・

慷慨、ありがと。奏さんつてほんと、
慷慨には甘いよなあー

そんな事ないと思うけどなあ・・・
奏はみんなに優しいでしょ・・・？

「どういたしましてっ」

キーンコーンカーン・・・

バンツツ！

乱暴に教室の扉が開いた。

來、柚木、優弥、冬夜と
話していた私は気に止めなかつた。

「 懐！ 懐はいるか！」

名前を呼ばれて振り向くと、
そこには・・・海龍。棟達がいた。

「 なんで・・・来るの・・・」

呟いて、來達の方を見ると

柚木が握ってる私の手に力をこめる。

「懐・・・！ なんでここに居る？」

「なんで桜花の奴らと居るんだよ・・・？」

悲しみと怒りのこもった瞳で

私達を見ている棟達。

「ごめんなさい・・・みんな・・・」

「来、柚木、優弥、冬夜来て。

棟達と話そう？」

「あの人達には言うしかないみたい」

みんな困った顔をしたけど、

ついてきてくれた。

「棟、行こう。少し話そうか」

私の手を握ったままの柚木を引っ張つて

歩く。

その後を來達と棟達が続く。

周りからみればおかしな光景だらう。

敵同士である桜花と海龍が
並んで廊下を歩いてるんだから。

裏庭に連れて行つて人が居ないのを
確認して、座つた。

「ごめんね、クラス替えたりして。
でも、奏が担任じゃなければ怖くないでしょ?
心配・・・してたらごめんね。」

できるだけ、話をそらしたくて。
こんな事を話すのが嫌で。

「懐! なんで・・・?

「話をそらすなよ! 聞かせててくれよ・・・」

弱々しい声で話す棟に心が痛む。

千津、朱鳥、楷、祥の軽蔑するような
視線がここまで効くとはね・・・

一緒に居たのは一週間くらいのこ・・・

泣きやうになるよ・・・・・

「」めんなさい・・・・・。

貴方達を傷付けるつもりはなかった・・・
私はもう貴方達とは居られないの。
この人達が一番大切だから・・・・・

黙目・・・泣いちゃだめ・・・・・

棟達にこんな瞳にさせてるのは私。
私がもっと突き放せばよかつたんだ・・・

「 懣・・・・・」

手を握つてゐるから柚木には分かつちゃうね
私が震えている事が・・・・・

「 懣・・・お前は・・・桜花の何だ?」

ハハツ・・・”桜花の何”か・・・
单刀直入だなあ・・・

「私が誰なのか知れば、

貴方達はきっと私には関わらなくなる」

当たり前だよね?

敵の総長と関わるなんてありえない

「お前らは幹部だろ? 総長はどうこだ。
総長と話したい。」

棟・・・まだ気付かないの?

あなたの目の前の私が総長なのに・・・

「棟、話す必要はないよ。

桜花の総長はここにいる。」

もう、棟達も気付いたでしょ？

「どうこう……」とだ・・?

まだ気付かないの?

頭で整理が出来ないみたいだね・・・

「私は、

桜花1・2代目総長、佐久間櫻

「「「「「は・・・・・?」」」」

そりゃ吃驚するよねー・・・

全國NO.1の総長が女なんだから。

「じめんね、でも祥に言ったはずだよ?
私に関わらないでつて。

もつ戾ろう來、柚木、優弥、冬夜

立ち上がったその時・・・

「おー、待てよー言い逃げか？」

棟・・・もう関わっちゃ駄目なんだよ?
今ならまだひきかえせるでしょ?

「何? 私が誰なんか分かつたんだから
もう十分でしょ?
これ以上桜花に深入りしないで!
貴方達とは争いたくないの・・・」

私は争うなら桜花のために本氣でいく
だけど、そうなれば棟達が怪我する。

「女のお前に俺らが負けるとでも?

海龍をあまりなめるな」

棟は分かつてないね。
棟達幹部が全員でかかつてきても、
私には勝てない。

「海龍をなめてるつもりはないよ。
確かに貴方達は強い。」

だけど……私には勝てないよ

来達は私にあまり戦つてほしくないみたい分かってるよ。

「櫻！ 戦つちゃ駄目だよ……

またあんな事になれば……！」

柚木……心配かけてごめんね。
でも、桜花のためなら戦う。

「柚木、あんな風になっちゃつたら

止めてくれる？ もし駄目だつたら……

陸にいと奏を呼んでね。 大丈夫だよ

海龍程度の力ではあんな事には
ならないだろう。

「じゃあ、お相手願いましょうか。
海龍さん？ 誰からくる？
全員でもかまわないよ

笑う私に対して、

悲しみを含んだ瞳の棟。

「よりによつてなんで桜花なんだよ・・・

1人に対して5人は卑怯だろ?つ?

1人ずつ出させてもらつ。」

甘いよ・・・棟。

何人きても変わらないよ

「始めは誰がくる?」

「そつだな・・・千津、行け」

千津ね・・・この中で一番弱いね・・・

「まさか櫻と戦うとはなあ・・・

手加減抜きでいかせてもらつ

「手加減？当たり前。必要ないよ
じゃ、スタート・・・」

合図で始まる。

拳が正面から飛んでくる。

「いい拳ね。だけど、遅い・・・」

ドスッ・・・・！

拳をかわして、

千津の横つ腹に蹴りを一発いれる。

「・・・シベ

ドサッ

「・・・・・千津ー」「・・・

千津が倒れた。

「だから言つたでしょ？勝てないって
冬夜、治療してあげて。

あまり酷くないはずだから・・・」

冬夜に治療を任せて、次の戦い。

「一氣に来てよ。

1人では無理だと分かつたでしょ？」

驚いた顔をしている棟達。

1発でやられるとは思つてなかつたでしょうね

「ハツタリでも無かつたようだな。

次は3人だ」

3人？全員でこればいいのに・・・

「いいよ。棟以外？」

「ああ。朱鳥は副だ強いぞ」

ほかの幹部よりは . . . でしょ？

「 懣 . . . 全部、嘘だつたのか？」

「 裏切者」

「 懣 . . . あなたは優しい」

今までの時間は”嘘”じゃない。
裏切ったわけじゃない。
優しくなんかない。

だけど、そんな事言つしかく無いよね . . .

「 . . . フスタート」

私が悪いの . . . 全部、全部私が . . .

3人相手でもすぐ終つた。

「祥、ごめんね。楷、その色好きだつた。

朱鳥、私は酷い女だよ

後は、棟だけ。

「棟、『じめんね』……

あなたの仲間を傷付けて……」

本当はこんな事したくないよ……
でも仕方ないでしょ？

「棟……お前は美しく強い女だ。
けれど、気取らず優しい。

そこに惹かれたのかもしれない……」

そんな言葉を今言つのはずのことよ

・・・・・ 棟

「『じめんさい』

今はすぐ決着を着ける。

後でみんなの事見にいくから……

私が傷付けたんだから
少しだけいいでしょ？

パシッ！

総長なだけあつて威力が違うね・・・
でも私に勝てるほどでもない。

バキいツツ・・・

「終わつた・・・ね」

グイツ・・・ぎゅつ

「ゆ・・・すき？どうしたの
私、大丈夫だよ？」

「大丈夫なら、泣かないでよ・・・
手加減してたじyan・・・」

私・・・泣いてるの？

頬に触れると何かが伝つていった。
――――涙？

「ほんとだ・・・なんで泣いてんだろ?」

柚木、棟達のとこ行つてくるよ。

ちょっと待つて?」

棟に約束したから、いかないと・・・

「嫌だ。俺もついてへー!」

もう・・・ワガママなんだから・・
でもこれが柚木の優しさなんだもんね?

「じゃあ、行こつか?」

「来達は待つってね、いめん」

——棟達の所で……

「棟……みんな、大丈夫?」

休ませてある場所へ行き、
声をかけた。

「よく、ノコノコとこれたな?
大丈夫? だと? なにいつてんだよ!
お前がやつたんだろ!」

楷……初めて会話した言葉がこれかあ……

ヤバいよまた、泣いちゃうよ……

「『めんなさい、本当に』『めんなさい。』

棟……少し話したいんだけど……
歩けるかな……?」

駄目だ……」に面たり泣く。
棟だけでもいい……

「ああ、行くよ。」

こんな事をした私に今も優しく話してくれる。

「そんな奴と話さなくていいだろ！
俺らを裏切った奴なんかと……」

いや……もつ……ヤメテ……
聞きたくない……

視界が滲んでくる……

「楷！少し黙つてろ！」

れ……ん……？

なんで私のために怒つてくれるの？

「チツ……」

「ごめんね、ごめん。

「棟、私は本当に知らなかつた。

棟達から海龍つて聞くまで誰か分からなかつた少なかつたけど棟達との時間は楽しかつただけど私は桜花の総長。

貴方達といふ事はできないの。

でもこれは言い訳だよね？

楷の言つたとおりだよ。

私はつ棟達を・・・裏・・・切つた

あーあ駄目じやん・・・
泣いちゃ駄目じやん・・・

「懊・・・？裏切ろうとして裏切つた奴が

泣く？懊は俺らと居て楽しかつたんだろ？
だつたらそれでいいじやん。

懊は裏切つてなんかないよ」

子供をあやすような優しい口調で
棟がはなす。

「でもつ！

棟達は私の事知らなかつたからつ・・・」

そう。知らなかつたから優しくした。
知つたら敵として瞳に映つてた。

「棟つて奴は分かつてくれたじゃん
來のとこに戻ろうよ？」

惣は笑つてゐ方がいい……」

私を後ろから抱き締める柚木。
心配してゐるのがよく分かる声。

「ハツ！ なにが”ごめんなさい”だ
さつきから思つてたんだけどさ、
ずっとそいつとくつ付いてて
結局は桜花の仲を見せつけにきた
だけじゃねえの？」

ああ、もう駄目だ……
ここには戻れないよ……

楷が認めてくれないだろ？ なあ……

「……つ！ “ごめんねつ……

棟……サヨナラ」

私は柚木を連れて、走る。

泣きながら走つて來達のところに戻る。

途中で止まって、

「柚木……」めんねつ？

でも……あそこまで言われるといつたすがに……キツイよお……

ボロボロ泣いて、

そして私は眠つてしまつた。

「穀、おやすみ……

よく、頑張つたね……

優しく囁く柚木の言葉は
眠つてゐる穀には届かない——

—— 懇達が居なくなつた後の棟達

(棟 s i d a)

「なあ・・・楷、

あれは言い過ぎだと思つ。」

ベッドから起き上がつた祥が言つ。

「つんでだよ？ あいつは裏切つた！」

俺も、

楷があそこまで怒るのは初めてみた。

「あの時だつたら、総長以外にも言えたはず。

楷は俺等に分かつてほしかつたんじやないか？

俺等を少しでも信じていたんじやないか？」

珍しく、朱鳥まで楷の味方になつている

「分かるって何を？」

「僕は実際俺等に正体を隠してた！」

「もういいだろ？ 僕が泣いた……」

「僕は俺等の前で泣いた事は無かつた」

俺等の前では見せなかつた弱味を
あいつ等の前では見せている事に苛立つ

「裏庭でも、口でも僕といった

「あいつは誰なんだ？」

「確かに……柚木って呼んでたな……」

他の奴よりもずっと僕の近くに居た。

「棟、そいつを調べるか？」

いや、恐らく桜花の幹部なら……

「いや、いい。

「情報は何もあがつてこないと思つ

直接……聞く。」

明日、
必ず。

——次の日

私は昨日のよつに來達と話していた。

（）（）

私の携帯が鳴った。
着信画面を見ると・・・棟？

少し出るのを躊躇つたけど
出る事にした。

「・・・はい・・・棟？」

『 懐か？昨日はごめんな。』

そこに柚木つて奴いるか？』

「・・・いる・・・けど」

『 そいつにかわってくれる？』

「うん・・・。柚木、かわって」

携帯を渡すと不思議そうな顔をしていた。

なんで柚木なの？

携帯が返されて、

「ごめーん、ちょっと行つてくるー」

なんで?どこ行くの?

「柚木?どこ行くの?

待つてよ、私も行く!」

いつの間にか私と柚木は1セツト。なにより私は不安感がおしよせた。

”また”大切な人がいなくなっちゃう。大きな恐怖感が。

「懐も来るの?んー・・・まあ、いつか

「1人でとかいわれてないからね
じゃ、いつてきまーす！」

柚木についていき、着いた場所には
棟と朱鳥がいた。

棟は柚木の後ろにいる私を見ると
苦笑いして、

「やつぱり櫻も来たかあ・・・」

と言った。

棟が朱鳥しか連れて来なかつたのは
昨日の事があるから、
棟の優しさだろう。

「で？聞きたい事つて何？」

まだ・・・なにか聞きたい事あるの？

「ああ、お前と棟はどういう関係だ？」

言いたい事は分かる。
私と柚木はいつも一緒に。

「どうつて総長と幹部だけ?」
それ以外になにが?」

「ほかに・・・あるだろ?」
「うう。私達は総長と幹部。
来達より一緒に時間が長いだけ

「ほかに・・・あるだろ?」

他の幹部とは違う事が「

なんで、

こんな事を聞くの?」

「柚木つ・・・帰ろうよ

もういいでしょ?

私に関わらないで。

これ以上私の大切な人を奪わないでよ

「大丈夫だよ僕。

俺はいなくならないから。

「 懇を独りにしないから 」

もづ、

アノ人達のように・・・

お母さんとお父さんのように・・・

誰も、失いたくないの・・・

「 海龍の総長さん、

別にそんなに深い関係じやない。
ただ、幼馴染つて事だけ
昔から知つてるからね」

私と柚木は幼馴染。

だから柚木は知つてるんだ。

アノ事件を・・・

「 なるほどな・・・

懇、もう屋上に来てくれない?
俺は来てほしい」

なにいつてるの?
いけるわけないのに・・・

「 楠が可哀想だよ。」

楷の居場所は海龍だけでしょ？

そこに私が居てはいけない。

私の事を棟はわかってくれた

私はそれだけで十分だよ

「本当は、海龍と桜花はなぜ敵なの？
つて思っちゃうよ・・・」

仲間ならこんな事にもならなかつたのに

「懐、仲間なら来るか？

仲間になれたらそいつの様に
そばに居てくれるか？」

本当に・・・

仲間になれたらいいのに・・・

「そうだね、でも無理な話でしょ？」

無理に・・・決まつてゐるよ

「なら、同盟を結ばないか？

俺等が仲間になつたら

争いも減る

ど・・・う・・めい?

「 は・・・・? 」

柚木も吃驚してゐよ

「 じゃ、考えといでな 」

「…………」

あれから学校も終つたけど、
倉庫へは寄らずに家へ帰つた。

同盟? いきなり言わわれても困るよ・・・

（）

最近よく鳴るなー

ディスプレイを確認すると、優弥だった

珍しいなあ、優弥が電話してくるとか

「もしもしー優弥? どうしたー?」

『 懲? 助けてくれー來達に殺されるー

つて、ギヤー? 来やがつた! 』

早く扉開けてくれ! 』

「はあ? 家の前にいんの?」

玄関に行つて扉を開けると、確かに優弥がいた。

無理矢理入つて来て扉を閉めていた。

「り、懔！助かつたあ・・・」

扉の向こうからは、

「おい！優弥、懔のとこに逃げるのは卑怯だぞ！」

「開けろーー！罰ゲームは絶対だーー！」

「懔～開けてよーー！」

何なの？

來も冬夜も柚木も全員いるし・・・

「ちよつと優弥！なんなの？」

「罰ゲームつてなに？」

意味わかんないし？

人が真面目に悩んでたつていうのにーー

無意識のうちに殺氣がでていたのか、
優弥がびくびくしている。

「ちよーー櫻サーーン？怖ッ！

話さーー話せばわかるって？」

「話せばわかる・・・だつて？」

「じゃあ、来達からも聞こうかなあ？」

1人から聞くより情報も集まるしね。」

私を怒らせるのが悪い？

「いや・・・！駄目だつて！」

拒絶する優弥を無視して、
扉を開けた。

すると来達が入ってきた。

「待ちなさい、来！」

優弥は後でどうでもできるでしょ？
まず・・・説明してもらおうかな？

優弥に襲いかかる來達を止めて、リビングへと連れて行つた。

ソファへ座らせてからキッチンへ行つた

「んーと・・お茶、ジュース、紅茶、
コーヒーのどれがいい?」

大体予想はつくけど・・・

來 「俺、コーヒー!」

優弥「ジュース!」

冬夜「俺もコーヒー!」

柚木「いつものやつ!」

予想的中だけどさー・・・

「柚木・・いつものつて

ここファミレスじゃないんだから・・
まあ、いいけどね。」

キッチンで準備していると優弥が来た。

「あのー・・・ごめんな?
いきなり押しかけてや?」

そんな事きにしてたんだ?
今更なんだけど・・・

「んーん!いいよ別に?」

「はい!コーヒー2つとジュース!
持つてつて!」

後はアレだけ、柚木のお気に入り。

チョコを溶かして、冷たい牛乳混ぜる。
コップにいれて上に生クリームをのせるー。

完成ー?

ソレをコピングに持つてく。

「はい、どーぞ。

今日は生クリーム入りだよ

柚木に渡してから座つて私も飲む。

「あれ？今日は凜もチョコのなの？」

私の飲んでいるのを見ていいう柚木。

「うん。チョコ溶かしそうにやつて
余っちゃうし」

んーそれにしても甘いなあ・・・
結構おいしいかもっ！

なんか和むなあ・・・

「つてちがーう？和んでる場合じやないつ
説明してつてば！」

チツ・・・

舌打ちの音が聞こえた。

「誰?舌打ちしたのは。どちらなんよ?」

やつれと説盟しゆぢ?

「ちちもだいんだつーの！」

ハセガワ・ヒロシ

こんなのが桜花の幹部でいいのか？

「 は、はいいい？ 」

「九月」

全員の説明と言い訳を聞いた後、一発ずつ殴つておいた。

「なるほどね。話をまとめるとい
罰ゲーム付で遊んでいたのに
優弥だけ罰ゲームをせず逃げたって事?」

別に遊びなんだから罰ゲームくらい
やればいいのに・・・

「あんな罰ゲームできるかー?
絶ツ対イヤだ?」

なんなの?子供?この人ら・・・

「どんな罰ゲームなの?」

「私にできる事ある?手伝おつか?」

気になつたし、

ここまで拒否ると可哀想だつたから聞いてみた

すると、優弥は真つ赤で
みんなニヤニヤしだした・・・大丈夫?

「懲には・・・言わない。」

はい?意味わかんないし。

罰ゲームくらいいいじゃん教えてくれたって

まあ、あの手でいきますか!

「ねえ・・・いいでしょ?教えて?」

ひつさ一つ!

うるうる瞳+上目遣いつつ!

これすると男は大抵お願い聞くんだつて!

「「「「・・・つ?¥¥¥¥¥¥」」」」

あれえ?みんな黙っちゃつたし・・

「・・・告白。」

ん？告白？

「は？なに言つて「懲に告白しちつて言われた！」

・・・・ what？なんで私？

「あのー・・告白つて好きな人にするもんでしょ？
だから優弥の好きな人にしないとね？」

優弥は不機嫌、皆は大笑い
つて違う？？

「なんで笑うの？当り前の事言つたのにー。」

そう言つと柚木が近づいて来て、
私を膝にのせた。

「懲～怒らないで？

俺は笑ってる方が好きだよ」

いつも同じ事言つてゐる。

”笑つてゐる方が好き”って言葉。

「知つてゐるよー？私も柚木大好きー」

笑つてそう言つと、

柚木は頷いてから優弥を見た。

「慎、優弥のスキと俺のスキは違うんだよ

んう……わけわかんない。
なにが違うんだろ??

いつてる事難しそぎるなあ……

「わかんないの? ま、仕方ないね」

柚木にわかんないの? って言われるとは……!
ハイ。相変わらず可愛いですよ?
女の私が悲しくなるくらいに。

ん……てゆーかさ、なんか……

「ん? 懈、眠いの? 寝る?」

ほら、柚木は私の変化にいち早く気付く。
だから余計に気をつかわせてしまう。

「……うん。寝る……

みんな泊まつてつていよいよ おやすみ！」

そういう、ベッドに寝転んでから
すぐに意識を手放した―――。

―――― 次の日の学校で

「はあ？ ほんつとに覚えてないの？」

柚木のばかあー？？？」

教室で怒鳴つてるのは
ええ、私ですとも。

教室の皆さんからの視線ガンガンありますけど…
そんな事よりも～～～っ！

「え？ は？ ちよつ、 懲なんで怒つてんの？
朝からずっと家でも怒つてたよね？
俺なんかした？」

なんもしてない奴にここまで怒るわけないでしょ！
ありえないんだけどつー！

私の 私の

唇奪つといて？

読者の顔をわんこわかるよーに説明すると . . .

——今朝

「 ん、あ . . . れ動けない ?

瞳をゆっくり開けると、

柚木の顔ドアップ

「ひやあつ ?

ん？後ろも誰かいる

クルツと顔を向けると、優弥ドアップ

それよつこの4本の手はなに？

んもー？仕方ないなあつ

「柚木つ！ 柚木起きて？ 朝だよ」

まずは低血圧なこの方からね！
寝起き最悪なんだよね・・・

「うにゅー···· 懐? まだ···· ね···· むい」

うこちーつむなこ?

「ダメー! ほら、おーーーーん?」

頬をぺちぺち軽く叩く。

してし。

「え・・・んつ！んう・・・ふあ・・・・・・・シツ・・・」

キスされちゃいました。

私は一つ学びました。

低血圧男の寝起きに近付くな。

せめて、軽いほうがよかつた . . .

は？あ、そうです。

ふつかい方されました。

「んーっ！俺久し振りにすつきり起きた！

ってあれ？ 懐どうかした？」

肩で息を整てる私を見て、
きょとんとした顔で聞いてくる。

「え？覚えて ない ？」

「さつけんなあああ？？」

――回想終了

「つ私、棟達のどこ行つてくる？」

つてな感じです。

「これはさすがに怒るよな？」

このままだと殴りそつ。
アノ事の返事もしなきゃだし。

廊下に出て、棟達の教室に向かう。
でもやつぱりあの子は

「？待つて！俺も行く？」

・ . . . 柚木はついてくるわけであつて . . .
言いあつてる最中ですけど？

分かってるけど、
繫いでくる手を振り扱えないのは
私の甘さ

「なんでついてくんの？」

「教室に居ればいいでしょっ」

廊下でも言つて合つ私達

「別にいいでしょ？ 慢と居たい？？」

なにそれつー言われるこいつちが恥ずい？

「でも、柚木こないだ棟あんまり
好きじやないつていつてたじやん！
無理にあわせなくていいよ？」

棟達の教室の前まで来てたのに
まだ言い続ける私達。

「なあ、お前らそれって喧嘩してんの?
思いやつてんの?どっちだよ」

教室の扉が開いて話しかけられた。

「「喧嘩? ?」」

声の主の方を向いて答えた。

怒鳴つ合つてるし・・・喧嘩だよねー

「つて棟? そつそつ、棟に用事あつて
こないだの件なんだけど」

棟を見て話すと、

その背中の後ろの席には・・・

-----楷。

勿論、朱鳥やいつものメンバーも居た。

「ああ、あの事か。

場所変えるか？朱鳥呼んでくる」

朱鳥を呼びにいこうとする棟の
ブレザーを引っ張つて止めた。

「いい、いいで話す。

「おちらの返事は○×よ。後は
あなた達次第。」

背伸びして、棟の耳元で

（楷、千津、諒には話してないでしょ？）

と言つた。

棟は苦笑いして、ああと言つた。

「じゃ、みんなの視線痛いから戻るよ。

では、失礼いたしました。

海龍の総長さん

「

そう言って、來達のいる教室へ戻った。

—— 懇が帰つてからの棟達

(棟 s.i.d.e)

ほんつと仲良いなあの2人、
言いあいの喧嘩が思いやりの言葉だった。

「 懇からの返事はどうだった? 」

すかさず朱鳥が聞いてくる。

「 ああ、OKだとよ。 」

「 後は俺ら次第だつて言われたしな? 」

この会話がわけわからないとこいつこ
元ひみつひみつ

楷、千津、諒がみている。

たしかに、その通りだな。

千津と諒はまだしも、楷がな

「 は? 懇がOKつてなんの事だよ? 」

俺ら次第つて ?

千津が真っ先に聞いてきた。

まあ、そうだよな。

田の前でわけのわからない会話してゐるかい。

「そりだな 屋上。行くか

キイイ・・・・・

屋上の扉を開けると風がふいた。
少し肌寒い。

「・・・で、どういう事だ？」

朱鳥は知ってるみたいだけど

全員が座ると、千津がきりだしてきた。

「ああ、お前らがどう思つていいかは
わからないが、俺は懐ともいたい。
だから・・・・・桜花に同盟を求めた」

言いくると、

千津も諒も楷も驚いた顔をしていたが
すぐ真剣な顔になつた。

「そしたら、承諾された。

「後は俺ら次第だつてさ」

俺の言葉に続いて朱鳥が話した。

「俺は大歓迎だ！！承諾したつて事はさ、
慷も俺らと居たいつて思つてくれてる
つて事だろ？」

ここにこ笑つて千津が言つ。

感謝するよ . . . 千津

「だよなー！慷とは争えねーよ！

慷の笑顔も嘘じやねえし？」

その通りだ。諒。

慷の今の笑顔は嘘じやない。

瞳にまだ闇があるけれど、
それを減らしたのはアイツラ、
桜花の存在だろつ。

「俺は . . . 、慷を . . . 、信じてみる

楷は憤の涙を見てから変わった。

確実に動搖していた。

怒ったのも、俺らの事もあるだろ？
が、憤を仲間として見ていたんだろう。

「ん、ありがとう。

じゃ、行くか？ 最強の姫のもとへ

そういう、屋上を出た。

教室に戻つて来てから、
来たちと話していると

ガラ

「桜花。こちらも了解した。
今日からよろしくな?」

私たちの横まで歩いて来て、
握手を求められた。

「ええ、よろしく。棟」

一緒にいてもいいと言われているようすで
とても嬉しくなつた。

桜花が大事なのは変わらないけれど、
棟達も大切だったから

周りから、

「なんで佐久間さんが？」とか
「桜花つて来さん達だよな？」とか
言つてる声が聞こえる。

そつか、知らないんだ。私の事。

「桜花12代目総長、佐久間慎です。」

以後あるしに、おれを

誰にでも聞こえる声で自己紹介

優しい夜
私

「「「「はあああああ？」」」

クラス中の皆さんのお悲鳴。

• 二二一 •

棟達＆來達は苦笑いー？

「懶らしいね？」

俺の懐はこうでなくちや

相変わらず私を膝に乗せて、
後ろから抱きしめてくる柚木。

でもね？・俺の・ってなによ・・・・?

「あ、言ひ忘れてたけど

俺らも「」のクラスになつたから」

・・・・・?「」ですか?

「ええええええ？でも！陸にいは？」

想像通りの反応だつたのか、

満足気にわらつて、

「勝手にしろだつて。

だから勝手にさせてもらつた」

自由すぎやしませんか？この学校。
陸にいが理事長だから仕方ないけどね

席が変わつて、（棟達が居た人をどかして）

諒 柚 來 優
楷 懷 棟 冬
朱 千

「うなりましたあつー

「なんで？俺めつちや寂しいじやん？」

千津、ドンマイ・・・・・！

それより、ね？

棟が教室入つて来た時からなんだけど
楷の視線がイタイデス・・・・・

なんでこんなに見られてんの？

楷は私の事嫌いになつちやつたのかな
だとしたら結構ショックかも・・・・・

「懷・・・・・」

ビクッ・・・・・！

嫌われちゃつたかもしれない楷に
いきなり呼ばれて吃驚しましたよ、ええ

「な、に？楷

思わず俯くと、柚木が手を握った。
パツと顔をあげると、
にこっと柚木が笑った。
それだけで、安心できた。

「あの・・・」「めんな？」

え・・・？

なんで楷が謝るの？

「どうしたの？謝らないでよ・・・」「

私が悪いんだから・・・

「いや、俺も言い過ぎたから。
惚に嫌われたと思ったら、
なんか悲しくなったんだ・・・」

私の髪を撫でながら微笑んでいる。

「楷、私嫌いになつてないの？」

「私も楷嫌いじゃないよ？」

嫌われてないんだ?
よかつたあ！」

「懲、よかつたね。」

私達のやり取りを見ていた柚木が
につこり笑つた。

「うんっ！」

だいぶ気分いいんだけど?
みんな一緒に居られるんだね！

——私は甘かった。

アイツがほつておくわけないのに。

私のせいで傷付く人増えてしまつていてるのに。

また、感情を捨てなければいけない時が
近付いていたのにね？

やはり私に感情必要なかつたんだね？

ごめんね、
みんな
・
・
・
・
・
・

海龍と同盟を結んでから数週間たつた
ある日の出来事だつた。

毎日とつても楽しく過げ」じていたんだ。
今日までは。そ、キョウウマヂ・・・・・

最近は棟達も桜花の倉庫にきて
いる。今日はいつものように倉庫にいた。

「総長！総長宛の手紙が届いてます」

下つ端君がどうぞといつて渡してきた
手紙には差出人が書いていなかつた。

誰だらう？・・・・・？

「ツ・・・・・・・？な・・・・・ん・・・・！？」

アイツか？

「柚木？？きてツ・・・・・？」

唯一アノ事を知つてゐる柚木に手紙を見せた
読んでいくうちに顔が険しくなつてゐた。

私は・・・いや、私達はけして許さない。
大切な人を奪つたアイツを・・・淳紀を・・・

「なんで今！アイツには会わない？
会わせない？」

クシヤツと手紙を握り潰して、
苦しそうな顔をしている柚木。

わかつてゐる。わかつてゐよ。
だけど、アイツをほつといてはいけない。
また被害者がでてしまふ・・・・・

だから私は守るよ。
大切な人達を。仲間を。
たとえそれが私を傷付けても。

「・・・・・どうした」

いつのまにか皆が私達を見てるし . . .
そりやあ手紙見てこんな会話してんだから
不思議だよねー?

だけ言えないよ。

「いや、なんでもないよ棟」

「言え。後その手紙見せろ」

なんで命令なの ?
棟、どんだけ俺サマなんだろう?

「嫌。まだ、言えない!」

「え？ ひょっ・・・おこつー。

「ほんとうの事だよ」

即答した私に何故か來が焦つてゐる。

「來？人の話聞いてた？」

「言えないの！巻き込むわけにはいかない」

ダレモワタシノセイデキズツカナイデ・・・

柚木は全て知つてゐる。

その場に居たから。私と一緒に。
巻き込んでしまつたから守るんだ。
絶対に・・・

「ねえ、懐 . . . ? いなくならない?
約束 したよね?」

不安そうに柚木が私を見るのは、

“はずれの廃工場。今夜1人で来い。
すべての決着をつけたくばな . . . ”

手紙にあつた言葉。

私のお父さんは桜花の10代目総長だった
お母さんはその姫だった。
不意打ちだつたんだ . . .
殺された時既に引退していたのに。

「大丈夫だよ。

柚木を1人にしていなくならないから

これは本音。アイツ等 . . . 蛇紀を潰して
必ず帰つてくる。

「…………たまには頼つて？」

幸いアイツ等蝶姫の正体知らないし。
頼れないよ。迷惑をかけつけたんだから。

「明日、2人でどこかに出かけよう？」

待つて。あの場所で。

必ず行くから。」

思い出の公園。初めて会った公園で。
待つていて、必ず帰つてくるから。

「やつぱり行かしてはくれないね。

待つてるよ。ずっと、壇が来るまで。
壇、これだけは覚えておいて。

「ひとりじゃないんだよ。」

ありがとう。柚木。みんな。
気付いてるんだよ？私。
みんな自由な事やつてるけど、ほとんどは
こつちの話も聞いてるんでしょ？

「そろそろ かな。
行つてくるよ、みんな。」

1人呟いて。

足音、気配を消して部屋をでた。

一筋の涙を落とし、目的地に向かつた。

「着いた 「 .

廃工場の中へ足を進めていく。

1つの扉に辿り着いた。

ばあああんつ！

それを壊して進む。

「蛇紀 潰す！—！—！」

総勢400人位だろう。

その中心にいる、最も憎む相手。

「あれー？ほんとに1人で来たんだあ？

凄いなあ。この人数、1人で出来るか？

暗闇の中、一羽の輝く蝶。

「無理だよなア？ギャハハツ？」

その美しさに誰もが魅了され——

「怖じけづいたかア？」

——力強さに圧倒される。

「チツ？無視かよ！……やつちまえ——！」

——今宵も蝶が舞う。

ドガツ

バキツ

ガツツ

「後は貴方だけよ？総長さん」

15分程で片付いてしまった。

1人1人が弱すぎる。

名ばかり大きくなつてしまつた哀れな族。

「私の前に、二度と現れるな」

「サミナリ。」

外に出て、空を見上げた。

「綺麗」

たくさんの中から星が夜空に浮かんでる。

「…………いつまで隠れてるの？出て来なさい」

分かつてたよ。着いて來てた事。
気付いてたけど、ほかつといた。

着いてくる事くらいわかつてたから。

來、柚木、優弥、冬夜、
棟、朱鳥、千津、楷、諒。

「なんで来ちゃうの？」

待つててて言つたのに

「ん? どうしたの? 珍しいね。」

あなたが抱きしめてくるたびに
・・・・・

心地いい、シトラスの香り。

「心配したんだぞ…………

勝手にいなくなんな
・・・

クス . . .

「大丈夫だよ。

柚木、明日2人じゃなくて皆に変更。
ちゃんと待つてなかつた罰」

蛇紀は弱い。

ただ心配だったのは銃。

所持してもおかしくなかつたから . . .

「えへへつ！

2人でお出かけできると思ったのに！――

顔はわらつてるよ？柚木。

「残念だつたね。

ただいま、みんな」

私には、

「―――――― 懊、おかえり――――――」

帰る場所があるんだ――――――

「ねえ、どこに向かってるの？」

今日は約束の日。

今は車の中でもどこに向かってる。
私だけどこに行くか知らない。

「着いたよ」

朱鳥の声で車から出ると、
そこは、

「ショッピングモール……？」

なぜかショッピングモール。

「せやーもうすぐ夏休みやん？」

その間に3泊4日くらいで海行こうと思つてん。

今日はその為の買出しや

泊り!? 皆で海行くの!?

「じゃあ、水着欲しい……」

もう駄くとどこからか、

店員さんがたくさん水着を持ってきた。

「俺らが選んだやつを着てきりやつよーーー

なあ！？いいだろ、
「懐

そんなに田をキラキラさせてお願いされたら

「來、
いよ」

つてゆーしかないじゃんかああーー

「よつしやあ……勝負だつ……」

しょ、勝負！？

「水着が懐に選ばれた奴の勝ち！－いいな」

「「「上等だ－－」」

喧嘩するわけじゃないんだから···

数分後···

「懐、選んで－－」

前に並べられた数着の水着。

誰が選んだか分かんなくなってる。

うん、この露出がヤバイやつ千津でしょ。

一つの水着に目がとまつた。

「···・···」れ

上はビキニで左胸に2羽の蝶。
下は短いスカートがついている。
黒を基調としたデザイン。

「あああああ

そんなに落胆しないでよ……罪悪感が芽生える。

「これ、誰が選んだの？」

一
俺
だ

• 煉。

煉が朱鳥が冬夜らへんだとは思つてた。
でもさ、煉が選んでるとは思わなかつた。

「凜、悩んでたよね？どれと悩んだの？」

そうもうひとつ候補はあつた。

それは黒の下地に色々なところに桜が
散りばめられていもの。

「これ」

指差すと柚木の顔が明るくなつた。
とゆーことば、

「それ、俺のーー！」

「離れる」

煉が引き剥がしてきた。
なによー・・・いいじゃんつ別に。
煉は不機嫌だし
他の皆はニヤニヤしてるし・・・・・

「ありやー、そーゆーこと? 奥様」

「やつなのよ、うちの魔術師たちがつけて

「誰でもあるものですから奥様」

「もうですわよね」

「ウタハタ」

來と千津の小劇開催された。

「わー、馬鹿が2人いる」

優弥が呟いた。

「「だ、誰が馬鹿だーー！」」

「五福臨門」

即答されていじけはじめた馬鹿2名。その間にも着々と買い物は進んでる。

「馬鹿共歩いて帰りますか？

嫌ならさつさと着いてきて下さい」

大魔王朱鳥様降臨！！！！！！

「はいいい！」

朱鳥最強
・・・いや、最恐。

「夏休み中に喧嘩は構わない。
でも警察沙汰にすんじゃねーぞー！」

奏の掛け声（？）がかかると、
教室からみんな出ていった。

「「夏休みー！ー！ー！ー！」

いました。ここにも馬鹿共が。
お察しの通り馬鹿副総長と阿呆関西人。

「 うるせえ」

煉は不機嫌だし？てかなんで？？
夏休みって嬉しいもんでしょう。

「ああ、そーゆー事。

じゃあ桜花の倉庫に来ればいい。
そつすればいつでも会える」

あ、久しぶりの冬夜だ。

出番少ないよねー。

(「めんね！-冬夜！-b」)作者)

「チツ・・・

煉、なんで舌打ち！？

てか誰に会いたいの？？桜花の下つ端？

凄いね、仲間思いだねえ！！

「煉、煉が会いたいのは

桜花の下つ端じやないからな」

・・・・・違つりじこです。

「ええつ・・じやあ誰・・？」

「ん？それは「知らなくていい

・・・・・なんですよ・・・・・

「おしえ「知らなくていい
「おしえ「襲ひがれ」

「おしえ「知らなくていい
「おしえ「襲ひがれ」

「おしえ「知らなくていい
「おしえ「襲ひがれ」

「おしえ「知らなくていい
「おしえ「襲ひがれ」

「おしえ「知らなくていい
「おしえ「襲ひがれ」

「おしえ「知らなくていい
「おしえ「襲ひがれ」

ケチ。煉の阿呆。馬鹿。

言葉には出せないので、
心の中で悪態をつきまぐる。

來達も笑わないでよね!!!!
朱鳥と冬夜だつて笑い堪えてても
肩が震えてるし!!!

「柚木」・・・

フラーと柚木に歩みよると椅子から立つた。
手を繋いで教室から出よつとした。

「嘆、今日は甘えん坊だね」
「嬉しいけどね、煉が怖いよ?」

「煉なんかほつとこでこーの……帰ろー。」

教室を出て廊下を歩いていると
後ろから「ほたばた」と走つてくる音が聞こえた

「…………」

「…………」

「呼ばれてるよ。」

「知りなつー。」

知らなこと言おうとするとい
後ろに呑め寄せられた。

「逃げてんじゃねー。」

気付くと煉の腕の中にいた。

「ふえー? なつ……離して。」

鳩尾に一発お見舞いして力が緩んだ隙に抜け出して、柚木の後ろに逃げた。

「つてえ

うん。知ってる。

100%の力ではないけど力いれたから。

「ちょ . . . 慄、手加減しないと

したもん! ! ! !

「ん? 煉なぜうづくまつてるんです?」

追いついたらしい朱鳥が聞いてきた。
それには苦笑いで返しておいたけど。

「馬鹿が殴りやがった

馬鹿とはなによ . . . 馬鹿とは

「へえ、そうですか。

凜はなんで隠れてるんでしょう。」

「変態馬鹿総長から逃げるため

「煉の事ですか 」

そうなんです、海つ！！！！

あ、叫んだのは千津、來、私ですつ
そして今、私は煉のバイクに乗ってます。
後ろね？前はもちろん煉。

「キレーだね！！」

「聞こえんでしょ？」

T 111

「れん！」

「… るせえ」

散々無視しといてそれ！？酷くない？？
バイクだつて仕方なく乗つたのに！！

あーあ自分のに乗りたかつたあー

隣を走っている車を覗くと、

それにまあ優雅に朱鳥と冬夜が紅茶飲んでますよーー！

「なにあの優雅な人達

海に来てんのに紅茶飲んでるよ

朱鳥のバイクは修理中で
冬夜はバイクに乗らない。
てかもつてない。

少し経つとバイクが止まつた。

「降りろ」

「はい」

うわー注目集めてんね。

まあ? N0 . 1とN0 . 2の上が金貢壇でしるし?

△たに前で女やあ△たに前だけと

「あの女誰ー?」「うだつ」

「馬鹿つ！－あの人は桜花の総長よ！－！－！」

「ううせ……！ 総長！ つかつこーーー」

…………。態度変わりすぎ。
てゆーか学校で発表したから
色んなどこで広まっちゃったんだ……
ま、別にいいけどね。

「水着に着替えよーよ！
懔の水着姿早く見たいなつ」

いや…………ね？諒くん…………スタイルよくないし。
あんま期待しないでよ？

「うん。着替えたらここ来るから。
ここにいてね」

そう言って更衣室っぽいとこへむかつた。

水着の上にパー カーを羽織つて、
さつきの場所に戻つて来た。
．．．．．皆さん囲まれてますけど。

「煉様あ～私と遊びましょ～よお」

「來くうーん」

私にはあんな恐ろしい所に入る勇気は
持ち合わせていません。

明らかに怯えてる人一名はつけーん！！

「うわー～～楷大丈夫かな？」

ほんとにねえ～～

朱鳥達が触らせない様にしてるけど～～～
あれはヤバイよ。～～つて、ん！？

「 ゆ、 柚木！ ？」

影から少しだけ現れてきた柚木。

「 あんなところに堂々と立つてれば女が
よつて来るに決まってるでしょ？」

「 だから隠れてたわけですか。」

「 んーでも來と千津はいいんじゃない？」

危険なのは楷と冬夜と優弥かな。
まあ優弥は女慣れしてないだけだけど

何気に冬夜も女嫌いなんだよねー。
楷ほどではないけれど。

でも初めて会った時は楷以上だね。

「 懈、 どうするの？ 助けるー？ ？」

もう一度あの集団を見ると
うん、 大丈夫そう。

「いや、もう終わるよ。待ってよっか」

眺めていると案の定すぐ終つた。
煉が「失せろ」って言つただけなんだけどね。

「お帰り。お疲れ様でした～」

慰めの声をかけると何かが抱きついた。

楷くんでした。

どうやら相当疲れたようですね。

「ごめんね、あの女の人が怖いんだもん」

私の隣に座ったのはどうやら冬夜らしい。

「冬夜、だいじょーぶ?」

俯いている顔を覗き込んで聞くと、
今度は赤くなつた。

「だつ大丈夫だからーーー。」

熱中症かなあ？

ただでさえ暑いのにあの集団に囲まれたしねーーー

「懲、可哀想だからやめてあげて。

とりあえず煉の所行つといでよ

え、なにが可哀想なのか教えてくれよ柚木。
まあいいや。煉の所行こつ。

「 」

行くまでもなかつたようです。

恐らく私を抱き締めてるのは煉でしょ？

「 懲 、 ナーあの女共 」

んーなんか最近煉に抱きしめられるの

多い様な気がする

「とつあえず離してくれるかな?」

「嫌

即答だよこの男! ! ! !

「マジ俺様! ! ! !

「懐はなんか抱き心地がいい

いや、そんな事言われても
着てるモノ薄いから体温が感じて
ドキドキするんだよおーーー!

「ひやあ つん」

首筋を舐められて耳たぶを甘噛みされた。

首筋、背中と舌を這わす煉。

「ハハ、弱いんだ?」

必死に声を抑えて涙目になる。

「フツ冗談だ。バー力」

ぽんつと頭に手を置いて煉は朱鳥達の所へ
行つた。

「なによ……アイツ……」

てゆーか私海どうするよ。
髪の色が……スプレー落ちちゃう……

「懔？ 海、入らないの？」

優弥、入らないんじゃなくて
入れないんですよ……

「髪、スプレー落ちちゃう

あーーって感じの顔になつた。

「んー、ビリじょうね。入りたい？」

そりゃそうでしょう。

頷ぐとキヨロキヨロして、

「よし……着いてきて」

疑問に思いながら着いてくと
岩に囲まれて人のいない所に来た。

「ここなら入れるよ。

スプレー持つて来てるし」

さすが、用意周到。

「ありがと……」

海に入るとやつぱり気持ちいい。
泳ぐのは好きだからなあ・・・

「見張つとくから上がつたらスプレーしてね」

なんだかんだで桜花は常人多いかも・・・
煉達に比べれば。

「二人で何やつてるの？」

しばらく泳いでると優弥のいる方から
声が聞こえた。

「んー俺は見張り？」

「懔どー」

「秘密つていつたら？」

「強行突破

あ、分かつた。柚木だ。

「わ、分かつたつて奥で泳いでる」

「へえ・・・行くからどいて」

退かなくとも強行突破でしょ・・・？

「え、でも・・・まあ柚木だしこいか

この人に見張りは任せちゃ駄目だね。
今の場合はいいんだけど。

「りーんつ　．　．　あ、髪　．　．」

海面に顔をだすと髪に反応した感じをみると

「やつぱり落ちるっ！」

カラコンも海水だしあるから
瞳も水色。

「うう。俺はこいつの色が好きだよ」

濡れた髪を撫でながら柚木が言つた。

「私も両方気に入ってるけどこっちが好き」

小さい頃は気持ち悪がられたけど

お母さんとお父さんは綺麗つて言つてくれた

この色　．　．　．

「ねえ後ろから物凄く視線感じる」

苦笑いしながら言つぐらいだから
だいぶ視線を送つてゐんだろうね . . .
優弥が。

「ふふつそろそろ戻るうか」

上がつて髪を少し乾かしスプレーをした。
これで蝶姫の姿はない。

「優弥ありがと。戻るうか」

お腹も減つたし、そろそろ昼食かな。

「あー！！！！いたつ！3人共どこ行つてたのーー！」

パラソルに戻ると諒が叫んで
視線が集まつた。

「や、ひみつと泳ぎ……ね」

・・・・弓くよ。

その迫力、可愛いから怖くないけど。

「お嘸いります? 何か食べたい物とか

あのー朱鳥さん? 後ろのせナード……?

「え? と……それは……?」

ソレを指差すと朱鳥が困った様に見た。
だって気になるでしょ……ドス黒い……モノ

「コレは……楷です」

え? 楷だよね真じゃないよね?

人間だよね?

「女が「じゅ……ワカラ寄つてくらから
いつなつちゅつて……」

あの、冬夜さん？貴方今「じゅうじゅう」で
言いかけたよね？

「最高だったぜ！――」

「やうやう――おねーさんがいつぱー！――」

うわ、こつちはこつちで嫌かも . . .
この馬鹿二人組こと千津と來。
キッラキラして暑苦しい . . .

「地獄だ！！！！！ 慢つなんで離れてつたんだよ . . .」

あの楷くん。私がいても寄つてくるでしょ？
怖いメイクのお姉さんに近寄るなんて . . .

. . . 恐ろしい！――

「安藤（柚木）ばっかりズルい . . .」

柚木巣廻してゐつもりはないけどなあ . . .

「え、俺は？俺も居たんだけど」

「御堂はどうせ相手してもらひつてないだろ」

「優弥……そんくらいでへこたれるな……
相手してないつもりもないし。」

「懐、それはほかつといてコレ相手して。
さつきから不機嫌なんです……」

朱鳥も大変だね、煉が不機嫌だと面倒でしょ。
絶対。

「煉、どした？」

「お前……なんで遠く行つた

質問する時はハテナつけよーよ……
まあそんなこと口に出さないし、
それより理由……蝶姫だからとか言えないし……

「人が少ない方が落ち着くんだよね」

嘘を付く。

ズキッと胸が痛むけどまだ、言えない。

．．．．．多分完全に信用してるわけではないから。

「そうか．．．

府に落ちない様子だけど気付かないフリをした。

．．．．．ほら、私はまだ弱い。

嘘について自分も相手も傷付ける。

海から帰つて一ヶ月過ぎ、

学校も始まつた今日。

私はある情報について調べていた——

「槐雨…………ふざけんな…………」

最近、一気に勢力を高めて全国ノ・イを
狙つてゐるらしい。

傘下がかなりいて一人一人は雑魚だけど
人数が多い。

「潰させるわけないじゃん?」

ニヤリと笑い情報をハッキングする。

今日は風邪と言つて学校を休んだ。

パタン

パソコンを閉じて息をはいた。

「今夜のショーカーはPM5時開幕。
さて、どれくらいヒートがでるのかな」

槐雨の強さなんどどうか事ない。
人数でどれくらい楽しませてくれれる?

わあ、ショーの準備だ。

向かつたのは海龍、
煉達の倉庫――

バンッ

「ここにちは。海龍のみなさん

煉こる?」

煉達は今日、暴走すると言っていた。
でも今夜外に出られや困るんだよね。

「あ”あ”？てめえここが……ソレだよ……？」

その男の声が倉庫に響き、

周りの下つ端達が騒ぎだした。

そりやそうだ。風邪と言って休んだ人が
今、目の前にいるんだから。

「「「「「「」」」」」」

幹部室にも聞いたのか咄ってきた。

「あはつこんこちは

ふざかひやうこひと壁に附いた。

「あれ？ こんばんは？？」

「おお、煉が語尾にハテナをつけた！！
って」こんな事してると暇ないんだよ。

「今日の暴走、止めてくれない？」

「無理」

・・・・仕方ないな。

「んじゃあ、煉。バイバイ」

煉の後ろに回つて手刀を落とした。
フラつと倒れてきたから受け止めて、
朱鳥に渡した。

「懲、なんのつもりですか？」

「暴走されると困るんだよね。

あ、ヤバ。じやね

後ろから罵声が聞こえるけど
そんなん気にしてられない。

海龍に行つた4日後

桜花、來に電話を掛けた。

「あ、來？今から桜花も傘下全員倉庫から
出るな。これ、総長命令」

『はあ！？お前なに言つてんの！？』

「じゃ、バイバイ」

『ちょつ懲！？』

無理矢理電話を切つて槐雨の倉庫へ
向かつた。ここから行けば7時には着く。

もしもの為に煉と來にこの場所と、
ショーや始まる時間をメールで送った。
どうせ、大人しくしてないだろうし。

「さあつて行きますか」

バーンツ

ドアを蹴破った。

「ここにちは。槐雨の皆サン」

「つてめえー！桜花の総長さんじやねえか。
俺らになんか用か」

目の前には500程の男の大群。

キモツ . . . !

「ええ。槐雨、潰そうと思つて」

「一人で？わらわせんな！ー！てめえら殺れ！ー！」

その男達が一斉にかかつってきた。

「Let's show time」

鉄パイプやらなんやら持つていて
戦いすらいが弱い。

でもこの人数ではなかなか減らない。

30分程たつた時、立つてているのは
ボロボロな私とボロボロな槐雨総長。
やはり女の体力には限界がある。

「…………う…………わあああ…………」

大声をだして殴り掛かってきた総長を
抑えて顔面を殴った。

その時、爆音が聞こえた。

「…………」

あはは、もう終わっちゃったし。

「遅……い……つづーの……」

フツとそこまで膝から崩れ落ちた。

そこで暖かい、愛しい香りがした――

――――――――――

來 side

――――

pop

倉庫で雑誌をよんでもいると携帯が鳴った。

『あ、來?今から桜花も傘下全員倉庫から出るな。これ、総長命令』

「はあ！？お前なに言つてんの！？」「

『んじや、バイバイ

一
ちよつ黨！

プツツー

あいつ何考えてんだよ……！
いつもなら一番に冬夜に伝えるのに、
今日はちやんと副総長の俺にきた。

なんか、おかしい。

「ねえ今のはなんでしょ？
どうしたの？？」

「コイツ。柚木が知らないのもおかしい。」

「傘下も幹部も全員外に出るなって……」「

懲が嘘までついて学校を休んだのは
分かつてゐる。

でも、それだけじゃない気がする

——

また、俺の携帯が鳴った。

「もしもし?」

『『 懐、いるか?』』

「いないけど。どうした? 煉」

『『あいつ携帯出ねえんだけど』』

それは俺も同じだ。

「知らね。やつを電話きたけど」

『『4日前に倉庫来て暴走止めろって』』

『『言つに来たんだよ。俺を氣絶させてしまだ』』

「 懐、4日前から . . . つとメールきた」

『『俺もメール 切る』』

新着メールの内容に驚愕する事になる。

「ツ・・・おい！今すぐ槐雨の倉庫行くぞーー！」

「「はつー？」」

「わがみさん

流石、冬夜もその情報を見つけたらしい。

現在時刻は7：00

槐雨の倉庫に行くには30分かかる。

「飛ばせよーー！」

信号なんか全て無視して速さだつて
尋常じやない。

でも、櫻が危ないーーー

「つてめえん所の総長は人を頼れねえのか」

すぐ横に煉達、海龍がきた。

「知らねえよつ今はそれどひがじやねえ

きっと一番柚木が責任を感じている。
懐の一番近くにいたのに気付けなかつた。
バイクの速度が速すぎる。

槐雨の倉庫に着くと中から奇声が聞こえた

「…………うわあああ……」

バンッ

「…………うわあああ……」

その光景は異様だった。

500程の倒れた男の中にただ一人、
少女がフラフラと立っているのだから。

「遅…………うつーの」

フツとそこで膝から崩れ落ちた。
煉が走りだし、受け止めた。

ぎゅっと抱きついてくるから
髪を撫で続けた。

「 懨 ツ ． ． ． 懹 、 り 、 ん ． ． ．

そのふわふわの髪を撫でると
眼を覚ました。
私を視界にいれるとぽろぽろ泣きだした。

「 柚 木 ． ． ．

眼を覚ますとそこは白い天井、
右手に温もり。

「 ． ． ． ． ． ん ． ． ．

「おはよー」

ガラツ

「あ
・
・
・
・
「
諒

りん?
楷

卷之二

「りいいん！！！」千津

のれ、マジでこんですナビ。

無言止めてくれない?

「痛つ」

「ちよつと柚木叩かないでよつ

ありえな . . .

「.

「ありえねえのはてめえだ凜」

ギロリと睨まれて何も言えなくなつた。

「何故あの日暴走を止めた?」

いきなりの質問に一瞬なんの事が
分からなかつたけど理解した。

「煉達の暴走のルートが漏れてた。

いや、漏らされてた。槐雨に。

暴走の途中に警察に囲まれる様に
槐雨が警察に流したつて感じ?」

考えたくなかった、最悪の方法で。

「じゃあ俺の所為、ですか . . . ?

情報の管理不足 . . . 朱鳥の所為じゃない。

「傘下に槐雨のスパイがいた。

あは、ごめんね。潰しちゃった

蝶姫として。

「緋雷ですね？でもあやこは蝶姫が・・・」

そこまで情報出てきてるならわかるでしょ？
蝶姫が誰なのか。

「そう“蝶姫”が潰した。薬中もいたし」

「こいつと笑いながら囁つて、
眼を見開いた。

「うじやあ、蝶姫は櫻——？」

「ンンン

「佐久間さーん面会時間終わりです」

返事をしようとした所で看護婦さんがきた。

「はーい。じゃあね、バイバイ

柚木と楷が離れようとしなかつたけど
無理矢理剥がして帰らした。

静かになつた病室に一人は寂しい。

「煉、出てきてよ。いるんじょ？」

病室のドアの方へ話しかけると
静かに開いた。

「お前、止めてくれよ。無茶すんな」

ああ、これだ。意識を失う時にした、
愛しい香り。煉だつたんだ。

「えへへごめんね」

抱きしめる力がさらにつまつて、

「お前だけは失いたくない……

「 懃、好きだ——」

「うやら私は頭がおかしくなつたりじい。

「 え？ 幻聴？」

煉が私を好き？

「違え . . . お前だけを愛してる」

もう、涙腺崩壊です

「泣くなよ」

もう何言われても泣こちやうつて . . .

「煉、好き。大好き。・・・んつ・・・」

「・・ふツ・・・れ、ん・・・う」

甘い、甘いキスが降つてきました——

「海の続き・・・・・していい?」

甘い言葉と共に。

「だ、駄目ツ」

「ツえ！？な、何事！？」

いきなり聞こえた叫び声での起床。
最悪の目覚めデス · · · ·

「なななんんでれ、煉があるねん！…」

え、
煉？？

「昨日いないと思つたら
ここにいたんですか」

תְּרִינָדָא ?!

「煉がなんで凜と寝てるのー?」

煉？寝てる . . . ?

「ハハせえ . . . てめえらなんでいんだよ」

耳元から声聞こえるんだけど . . .
てゆーか息かかってるしつ . . .

「 懐のお見舞い」

楷助けてえええ！――！――！

私、耳弱いんです――！――！

耳にフーってやられると死ぬ！――！

「 いらん」

なんで煉が決めてんだよ！――！

そんな事より離してえええ！――！――！

腰にある煉の腕が太ももらへん
撫でてるの氣のせいですか！――？

つーか耳元で喋んないでえッ

「つれ、ん・・・・・耳ヤダ、手も・・あ」

変な声でるじやんーー！
喋るのもやつとだし・・・つ

「何が？」

楽しんてるよコイツ！ーーーー！
悪魔の笑み浮かべてるよーーーー！

「へへッ・・・・／＼／＼」

・・・あれ？千津の顔真っ赤なんだけど。
まさかの意外な純情b o y！？

「ちやうわーー！俺は純情やないつ

新事実発覚。女たらしだと思つていた
千津くんはただの純情b o yでした。

「千津、懔は俺の女だから手だすなよ

改めて言わると恥ずかしいね、うん。

「はじはじ分かつてますう～つて
ええええ！～！～？」

「やつとくつめましたね」

「え～・・・・・

「・・・・・

「うううう楷が可愛いつ

諒よつ可愛くみえる・・・・・

「ん、ほんと」

煉の呪縛からとかれて自由の身になつた
から楷を撫でながら言つた。

「そつか

楷と諒を足して2で割つたら柚木になりそう。
だから楷はこんなにも安心するのかも。

「今、何考へてる?」

突然の声を誰のものかも確かめずに
答えた。

「柚木に会いたいなあつて」

ハツや、ヤバイ……

「へえ、安藤?」

まさかのまさかで俺様魔王様総長様降臨!!

「え、えーと……ね? 柚木は、その……」

「 懷～ 」

な、なんてタイミング！！

「 お前の大好きな安藤が来たぞ 」

嫌味だらうけど“大好き”っての間違つてないし。
実際、大好きだし！！！！キスされたけど！？

「 え？ 何？？ 煉に敵視されてる？ 」

うん、可愛いよ柚木。

「 來達は一緒じゃないの？ 」

煉は不機嫌だけど本物の柚木の登場に
少しテンションあがる。

「 うん。 來と冬夜は下つ端とか傘下に
懐の入院を伝えてて忙しくて、

優弥は まあ、ね？」

え、ね？って言われてもどうしようもない
んだけど。

まあ可憐いから許そう。

「でもよかつたね」

いきなりですね。

「煉とせき合ひしるんでしょ？」

・・・・・・・！？何故にわかる……言つてないよね？？

凄いね、勘が冴えてんね。

「 . . 煉も大変だね」

「あ？分かつてなんなら離れるや」

煉くん……口調がヤーさんだよ……

「それは無理かなあだつて俺と懔だしね。
懔のファーストキス俺らしいよ」

何！？どういう意味！？俺と懔って何！？
てゆーかキスの事覚えてたの！？
確かにファーストキスだつたけど
ここで暴露するなよおおお！？

「 . . . あ ” ？

ギヤー！…………魔王様再びー！？！

「んう . . . ふ、あ . . .

つて何ー！？！魔王様の綺麗なお顔ドアップで
唇に温かくて柔らかい感触がー！？

「 な、ななな . . . ! ! / / / / /

ありえないー！？みんないる前でキスするー！？

「 こいつは俺の物。お前は別の探し

物つて何！！！！人だし！！に・ん・げ・ん！！

「あははっ 懐を奪おうとかじゃないよ？」

「ただ俺のお姫サマは懐だけだよ」

ちゅ、とほっぺにキスして病室からでてつた。
煉に何かを囁いてから。

「んじや俺たちも帰ろか～」

「そうですね」

「懐ばいばーい」

「．．．．．またな」

ピジヤ

「懐、安藤がファーストキスの相手つて
本當か」

みんな帰った瞬間、ベッドに押し倒された
凜ちゃんです。

「本当、です」

嘘ついたら危険そうなんで、正直に。

「ディープだつてな」

無口キヤリ崩壊してゐるよ。お練さん最近よく喋るね。

「ツ / / / / /」

思ひ出せないでよ。

アレ真面目に窒息寸前だつたからね！？

」
・
・
・
・
」

つて何してるの！？

煉の手が裾を捲り上げよつとしてるんだけどーーー！

「やだつ ． ． 何したいの？！」

抵抗しても男の力には勝てなくて、
下着があらわになつた。

「煉～つ／＼／＼／＼

ブラまで取るうとするの元は
全力で抵抗した。
でもやつぱり勝てなくて ． ． ．

「やだあ ． ． ． も、恥ずかしいッ」

手も抑えられて足も動かせなくて
ただ見られてる羞恥に耐えるしかない ． ．

「チツ ． ． ．」

舌打ちしたと思えば顔が近づいて来た。

「あんッ . . ャ . . あ れ、 んッ 「

こんな事無理矢理やる煉が怖くて涙がでてきた。

「あ・・・」めん・・・

涙を見て煉の眼が揺れた。

「アーメン、禰アーメンな」

服を元に戻してギュッと抱きしめられた。
いつもの煉と落ち着く香りに
涙が止まつた。

「ん・・・・あのね煉が嫌なわけじゃないよ?

いつかは起じる事でしょ？

急すぎてちょっと怖かつたんだ」「

煉の何も映していない瞳が怖かつた。

「うめん。安藤の言葉が本当だつたから
アイツとそういう関係になつた事が
あるかもつて思つた」

柚木？

「 懨の左胸に黒子が一つあるんだよ、

あのや、なんでそんな事知つてんの？
いくら小さい頃お風呂とか入つてるからつて
なんで覚えてんのおおおお！――！

「なんで…? ねえ、春…! なぜ…?」

「ちょっと落ち着けよ 懐…!」

「落ち着こうるわあ…!」

荒れます。佐久間懐、荒れます。
だってさ! … 酷いんだよ! …?

「なんで総長が幹部室追い出されるの…?」

煉達みんなして入れてくんなかつた! !
柚木までもがだよ! ?

「や、俺に聞かれても…!」

んでこのキャラがつくるのは春。

下つ端くんで一番仲良い奴。

「いいもんーー！アイツ呼んじやつからーー！」

「ええーー？アイツって誰ーー？」

つて事で電話

「萩ちゃんーん！柚木達酷いんだよつ

んでね、めつっちゃ暇なのーー！
だから桜花の倉庫に来てーー！」

『え、ゆずが酷い？まあいいや。

丁度近くにいるからすぐ行くよ』

「ほんとーー！萩ちゃん大好きーー！」

『ありがと。あ、もう見えてきた』

「早いね

『うん、車だからね。出てきてくれる?』

「うん……じゃ切るね」

プツツ

「えつ と り、ん?」

萩ちゃん優しい!—どつかの誰かさん達とは
大違い!—

「あ、行かなきゃ」

春の声は無視して、外にGO!—

「萩ちゃんつーーー」

外に出ると向から樂しそうに門番をこと
雜談中。

「あ、懐久しづりだね」

「うん……」

「総長、お疲れ様です……」

「番さーん空氣読もうつよ。」

礼儀正しい事はいい事だし怒らないけど。

「懐、最近本家には全然来てないね」

本家・・・世界TOPの佐久間組。

「ん。でも仕事はしてるからいいでしょ？」

萩ちゃんは佐久間組でも上の人間で、
私の執事的存在。

「まあね。中はいつていい？」

「いーよ……」

萩ちゃんは桜花のみんなと知り合い。
だからわたくしの門番わんともね。

「 懐ー！…！…！勝手にどりか行くなよ…」

「俺が煉さん達…に….?どりりさん?」

あ、そつか。春は桜花の下つ端じゃないしね。
海龍、煉の方の下つ端だから知らないか。

「あのねえーこの人は…・・・ってあれ?」

「萩さんお久しへりですー！」

「また喧嘩教えてくださいー！」

「萩さん…」

桜花の下つ端に囲まれてる。

「もーーー私の萩ちゃんとるなあー！」

「総長相変わらずですねー」

「俺らにも貸してくだせりよ~」

暇だったから呼んだのに無意味じゃんーー！

「———」

煩い倉庫内でもはつきり聞こえた声。その声に反応してそつちをみた。

「煉つ！！」

暇すぎて、寂しすぎたから煉に抱きついた。

「あれ、誰だ」

「萩ちゃんだよーーー! 暇だったから呼んだの」

煉は俺様総長様だけどなんだかんだいって
優しいし甘い。

だつて今も撫でてくれてるし。

「俺がいない間に浮気か？」

「五、憲法上的一般問題」

「お前の周り野多すわー・・・」

でも私が恋愛の好きなは煉だけだもん！！

「・・・う／＼／＼知つてゐる」

「え？ ． ． ． 声 こ で て い ん ． ． ． ． ． 」

煉つてキス魔だよね？

「あんま可愛い事こいつと襲いつぶ」

か、可愛いって・・・！？

「襲えないよー」

「……ちょっと来い」

来いつていってるけど腕引っ張つてんじょーーー！

バタン・・・力チャ

・・・え？

鍵、閉めた・・・？

「煉・・・? なんで鍵閉めるの?」

「こ」は倉庫の奥の仮眠室。

「俺結構頑張つてんだよ」

何を???

「お前を」一したいって

「つれ、ん？」

いつもと違つ煉。

ベットに押し倒されている。

「び、したの？？」

「喧嘩強くても男と女の力、じゃ結局

いつこう場面では女が負ける」

たしかに、私の方が強いはずなのに・・・
私の腕を抑える力を振り払えない。

「んつ・・・ちよ、ッふ・・・煉つ――・・・

「分かった？ いつでも襲えるって事」

キスされて駄目だと思った瞬間離れた。

「うん . . . でも煉ならいいもん . . . 」

「ツ 煉んなよ馬鹿櫻 . . . 」

「煽つてないもん！――本音だし――」

「れーん――――りーん――――」

「やばつ . . . 」

「煉つ . . . みんな来ちゃうよつ」

「鍵掛かつてる . . . 」

「でもつ . . . 「黙れ」んんツ . . . 」

「意識が朦朧としてきた . . . 」

ガチャガチャツ

「煉――――」だろ！？開ける――――」

「懲り放置しないから戻つておいで」

優弥と柚木・・・

「ゆ、ずき・・・ふツ・・・」

「」の状況で他の男の名前呼ぶな
ばあん!!!

「懲つ・・・」

ぐわつ・・・し、死ぬ・・・

「大丈夫!? 襲われてない?」

「しゅ・・・ちや・・・苦し・・・」

萩ちゃん!..苦しいよ!..窒息!..

「萩さん、離さないと凜が死ぬよ？」

ゆ、柚木・・・・・！助けてくれるのは柚木だけだよーー！
これで放置した事許してあげるーー！

「あ・・・『めんね、懐』

目一杯酸素を吸つた。

「んー大丈夫だよ」

「萩さん昨日ぶりだね」

柚木が萩“さん”って呼ぶのは実は柚木も
佐久間組の組員だから。私の相棒的な

「柚木昨日、本家行つたの？」

萩ちゃんは本家に行かない限り会えないと
思うけど・・・

「うふ。溜まつてたからね

何が?つていうのは仕事が。
私も溜まつてるなあ . . .

「せつかあ私も行か「ちょーつと待て!—!」

なんだよ千津 . . .

「本家つてなんや . . . ?

あ、しまつた。言つてないや。

「佐久間組の本家」

ピシッ . . . つて効果音が合つね、コレ。
見事に固まつたよ柚木と萩ちゃんと私以外。

「せ、くま . . . !?」

「Y e s

「え、柚木と懐が！－！－？」

佐久間つそんなに有名だったの？
なんか感動！？

「そこに正座しなさい」

一、怖いよ朱鳥さん

「でも、穢れの事だ。

きみも怖いよ · · · 冬夜くん · · · · ·

「いやあ、煉達が知らないのは知つてたけどまさか冬夜達も知らないなんて……」

マジですか!?

本気で知つてゐると思つてたし！！

「佐久間組つて事は懷はただの組員つて

「事じやないよな」

はい、その通りで」「やります……
今の組長は私……だけど高校生だから
祖父つてことになってる。

「一応、組長は祖父つて事になってるけど
実際は私に全て決定権がある」

ようするに祖父は名前だけつてこと。

「ふーん……柚木は？」

「えー……俺のことは別にいいでしょ？」

柚木は跡継ぎのいない佐久間にとつては
若頭みたいなもの。

「黙れ。話して」

……言おうよ。お一方の後ろに般若と魔王が……

「もー怖いなあ。俺はねえ幹部だよ」

組の幹部にいる柚木。

私の幼馴染だからって理由じゃない。
ちゃんと幹部になれる強さがあるから。
まあ言つちやえば副総長の來より強い。

「あ、最年少幹部ね」

高校生だしね。

「でも他にもいるじゅん、次期組長」

私に隠し事は不可能だよつ

「「「「は・・・・」」」

そーんな驚いた顔しなくてもよくない??
苗字聞いたときから知つてたしー!

「ね、れーんくん」

柊煉・・・柊組つてね繫がつちやつたわけ。

珍しい苗字だし確信してた。

「 . . . ああ 」

全く問題ないけどね。

「あきちゃん元気?」

柊秋良ことあきちゃん。

柊組現組長。

「親父のこと知つてんのか?」

「もつちろん」

だつて柊と佐久間は仲良いもん。

「あ、奏と陸矢と萩ちゃんも幹部だよ~」

桜花を引退した人は大体佐久間にに入る。

「 「 「 「 「ええええーーー?」」」

まあ萩ちゃんは例外。

「だからあんなに怖いんやな・・・」

「こやあればもともとじだよ千津」

でも奏つて怖いかなあ?

怒つてもそんに怖くないんだけビ

「ねえ今思い出したんだけビそれ・・・
なんで幹部室いれてくれないの?」

みんなが、あつ・・・・・つて顔した。

「ねえねえなんで?」

煉の顔を覗き込んで囁つと、

「・・・田を逸らされた。

「うつゅ・・・なんだよう・・・

「煉ー・・・・?」

ちらつと横目で見られてまた逸られる。
うー・・・あ、泣けてきそう・・・・・・

「・・・・・」

煉から離れて柚木のとこにいった。
こんな事で泣きたくなくて近くにいたら
泣けてきそうで離れた。

「懲・・・・」

柚木は多分わかってる。泣きそうな事。

「おいで」

差し出された手を握ると柚木が微笑んで、
少し落ち着いた気がする。

「うよひとね散歩してへる~」

そつやつて小やこ時から助けてくれて . . .

「懲、大丈夫?」

お散歩とかいこつつ倉庫にある柚木の部屋に
きただけ。

「ん . . . 」

あんまり喋ると煉のこつもよつ素つ氣ない
態度と柚木の優しさに泣けてきそつで . . .

「泣いていいよ」

頭を撫でて優しい声をだすのは反則だ . . .
泣こひやひでしょ?

「ふ . . . う . . . つ . . . 」

ギュッと柚木の胸に顔を埋めて泣いた。

「……………ツく

だんだん落ち着いてきた時に、
柚木が話し始めた。

「ねえ懔、俺ね嬉しいんだよ

なにが……？

「懔に特別な人ができたこと

特別つて言うなら柚木だつて……

來達に泣けつて言われても私は泣かない。

「それでも変わらず俺といてくれる

大切な人を失いたくない。
笑つていてほしいから。

「煉はねさつきの邪魔されたから

拗ねてるんだよ。

それに好きな子に上田遣いされて

頑張つて理性を保とうとしてたんだよ」

あれは邪魔されてよかつたよ。

だつてあのままだと抵抗しきれなかつた。

「 懇が俺の所来たとき
俺、物凄い睨まれたしね。

懇が俺の手握つた時とか出てくときとか
今にも殴りかかってきそうだったよ」

「 懇。だつて殺氣とか全く感じなかつた。

きっと告白は煉の氣の迷いだつたんだ。

ほんとは私の事なんて好きじゃない . . .

「 柚木 . . . どうしたら煉の氣持ちわかるかな」

「 煉も素直じゃないからね

知つてゐる。素直じゃないけど、
不器用だけど優しいんだ。

「もう戻る？」

「やだ……後ちよつ……「バーンツツ」……！？」

「やーっと来た」

なんでここに？

———
· · · · · 煉

「懷こつち來い」

顔を向けると走ったのか息を切らしてゐる煉

「な
・
・
・
に
・
・
・
・
」

ゆっくり近付いてくと痺れを切らしたのか
腕を引っ張られた。

抱き締められて動搖する。

「勝手に離れてんじゃねえ」

「れ、ん・・・?」

「びひしてそんな切ない声だすの?」

「じやーねえ~」

柚木がでてつた部屋は静か。
だけど心地いいものだった。

「俺はお前が好きだ」

胸が高鳴る・・・びひこ~
「嘘じやないの?」

「お前ことって安藤が必要なのも、
そこには恋愛感情がないのも知ってる」

「…………」

柚木に恋愛感情を抱いた事はない。

「でも…………嫉妬する」

なんか可愛い…………

「んっ…………」

「お前は俺のモノだ

やつぱ俺様だつた

「…………ん、ツふ…………煉…………」

酸素を求めて口を開けばさらりと激しくなる。

「…………んんツ…………ハア…………」

逃げてもすぐ舌でからめとられて
力が抜けた時やつと唇が離された。

「あの上田遣いは . . . ヤバかった。

他の男にやるなよ」

してるつもりないけどなあ . . .

「 . . . 幹部室、もう入れ」

入れっておかしくない？？

いれなかつたのは自分達なのに！！

「はいはい」

でも嬉しいから見逃してあげる。

ガチャ

「ただいま」

つてあれ . . . 誰もいない?

「煉、誰もいな

煉、どー?」

さつきまで横にいたのに
部屋は暗いし怖いよ

「れ、煉つー!」

シーン . . .

あう怖い

「ゆ、ずせ ?」

返事はない

なんでつ?怖い、怖い怖い!ー!

「萩ちゃん . . . つ

怖いよ . . . 泪がまた

「來 ? 冬夜あ . . ゆーや . . .
「ううへ . . みんなビヒお . . . ?
「. . . . ?」

(ちょ、泣き始めちゃつたよ)

(優弥まだだ)

(懃、暗いとこ苦手なんだよ?
一人も嫌いだし . . .)

(仕方ないよ柚木)

(冬夜だつてでたいくせに . . .)

暗いし一人ぼっちだしで不安な私には
そんな声は聞こえなかつた。

「楷へ . . 朱鳥ツ . . . 」

コンコン

「失礼します . . つて暗! ! あれ、懍?」

「うわあああん! ! 春ううう! ! ! !

暗くて怖くて泣いてた私に救世主が . . .

「ど、どひたんだよーーー！」

「ヒック . . .みんな、いないの . . .」

「はあ？ そんなわけないだろ！」

「怖かつたああ . . .！」

パニックに陥つてた私との会話不可能。

「つか離してくんね？ 総長に殺される

そうこえれば毒に抱きつこうだつた . . .

「やだ . . . 怖いもん」

離したら毒も消えちやうで怖い。

(ねえ春殺してもいい？)

(駄目だ早まるな柚木)

(チツ . . .)

(煉も抑えてください)

(慄 . . .)

「頼むから離してくれ . . . 頂さんには
殺される . . . !」

「怖いもん！ やだああ！ ！」

「お願い春 . . . みんなが来るまで側にいて」

「こんなとこに一人でいられない！」

180cm位ある春と160cm位の慄との
身長差で上目遣いになつて、

顔が真っ赤になつて春に慄は気付かない。

「わ、わかったよ . . . 」

「ありがと春！大好きっ」

その言葉でさらに赤くなつた春に
そろそろ幹部達も我慢の限界に . . .

「はーるーくん　．．．死ぬ？」

春にしがみついていると突然聞こえた声。
「の姫は　．．．．．！」

「 オーラー　．．．．．！」

「 ょしきはかつたあ？」

「かづりから出したあ？」

「．．．部屋の中によいたよね？」

「なんで隠れてたの？！酷こよつ

真つ暗だったのも全部意図的にやつた事！？

「えへへ」めんね。

でも言ひだしたのは來だよ

「柚木イイイ……裏切るのか！？」

「…まさか全員いるの？」

「え、だつて本当の事でしょ？」

「つーかお前出てくれの早えんだよ……
もう少し隠れてろよ！……
煉もひやんと隠れてたんだわ！」

「…煉？」

「れへんへんつ出てきてよ」

「ふざけんなよ、馬鹿どもが

「あ？なんだよ

えへへへなめてんの？」

「なんだよ、じゃねーよッ!!」

「！？つてえな」

え？ なにしたって？ 殴ったんだよ

「知るか！ ！ こつちは ． ． ． こつちは ． ． ．
怖かつたんだからあ ． ． つ ． ． ． ． ． ．

「わかつたから泣くなつて……」

「泣い　・　て　・　・　ない、もんつ」

泣きそうだけど泣くもんか！――！

「あゝ煉が嘆泣かせてる」

今は悪魔にしか見えないわ！！馬鹿諒！！

「ちよつ・・・懊、『めんな?な?』

「ゆうへやあへつ

まともなのは君だけだ!!

どつかの腹黒二人組は笑つてゐし、
馬鹿共も爆笑してゐし・・・・楷は寝てゐよ!?

「わわつ・・・・・・・・・・・・

「・・・・・おい、御堂」

優弥に抱きついてるとひつく〜い声が・・・

「俺!~?これはお前らが悪いだろ!~?」

「・・・あ?」

煉サンです。

「煉なんか嫌いっ

「あわわ……り、凜つ……それはヤバイ……」

なによう……へタれ? 優弥はへタれなの?

「へタれじやなーっ!」

え~でも煉にそんなんバレッてたら……
へタれでしょ。

「違う……」

つてかまさかのまさかで……

「声にこだしてゐるー?」

「遅……遅つたな」

「ひおせー!」

腕……肩の関節外れの……

「んっ…………ふ…………あ…………」

え?え?ええ?!

や、キスされた…………?

「隙、あつす、わ」

「ば、馬鹿煉――――――!」

みんないる前でなに堂々としきりやつてんの――?
羞恥といつものはないのか――!

「嫌じやないくせに

「やせ――――――やめ――――!

思わず柚木の後ろに隠れた。

「うよつと煉今はやめてあげなよ~

なんか怯える仔猫みたいになつてゐよ」

今は――?今はつて言いました?柚木さん――?
今じやなけりやいの――?

「 . . . そ、うだな。ボソツ . . . 後で」

今ボソツと後でって言わなかつた！？
に、逃げなきゃ . . . !」

「しゅーちゃんあーん . . . 」

ああ . . . なんか疲れたよ . . .
いつの間にか春はいないし . . .

「ん？あ、懔お疲れ様。煉と付き合つてゐるの？」

そうですとも。俺様ですけど？

「秋良さんの息子だよね？」

そーですよ . . . でかいつの間に仲良くな?

「うん、問題ないね」

なにがですか . . . 萩ちゃん . . .
すいへ座じこみ、そのスマイル . . .

「今日わかるよ。本家いくから」

「へー . . . 本家ですか . . . つて、えー?」

「聞いてない . . . 」

「だから迎えにきたんだよ」

退院してすぐだよ?」

「あ、もう時間。ゆずも行くよ」

よかつた。柚木も一緒に . . .
あ、別に家族関係が悪いとかじやないよ?
まあ . . . わかるよ。

「はーい。つて事だからじやーね

「……………」

みんなの突っ込みを無視して車に行つた。

— — — — —

「……て……も……」

「ん

「おーもひ」

んぬ
・
・
・
柚木おはよー

「嘸、着いたよ。組長のところへ行つておいで

萩ちゃん　・・・ヤダよ　・・・

「萩さん、俺は？」

「ニ」一「緒」も「ア」も「」

だつておじこちやんといつて……

「つーん———」

「うづ」

「遅かったの〜〜

孫」〇∨Eだから

「組長 . . . 懐が死にかけてます」

助けてええ . . . 柚木

「おお……おず坊か……」

「いや . . . ゆず坊つて歳でもないですつて . . .

「がははは……わしの事もじこちやんと

呼んでくれーーー！」

「無理です」

押されてもよ……おじいちゃんの勢い……
止めよ。うん、帰りたいし。

「ねじこちゃん、話して何つ?

「ね、ねじりたな。

では、わしの部屋に行くが。

萩は夕飯の手伝いでもしてやつてくれ

「は

はあ……せつとか。

「お嬢、頭、柚木さんお疲れ様です。」

いや、なにもしないよ?
全くもつて疲れてないです。
君たちのが疲れてんじゃないですか?

「 もう、お出で用意を終えられたのか？」

「 「 ゼニ...」 」

「 嘘、よく聞くのじゃ」

部屋に入るとこひくなく真面目な面持で
おじこわやんは話しあじめた。

「 も湿」 」

呪文を唱えてゐる

「 「 ズ...」 」

い、いれなり...?

えええ...。高校生だよ? しかも一年...!

「 も、待つてください...」

そんなのこなつすもせんか?...」

ほら、柚木も言つてるよ？

「な、ひめ坊ば、ハジキ。」

よく知つとる相手じやろう?」

俺まだ死にたくないです！！

死ぬ！？なんで死ぬ！？ · · · · あ、煉

「まあ待て。その見合い相手じゃがのイケメン（？）つていうんか？まあ顔がええんじや。

「どうや? 考えてみんか」

「だ、誰なの？その相手

する気ないけど。

「 懐も秋良の事知つとるじやろ？
その柊の息子じや 」

「 ． ． ． ． ． 柊？ 」

「 ． ． ． ． 煉 」

柚木と顔を見合せた。

「 ねえ 懐 ． ． 煉つて 柊組だよね？ 」

「 う、うん 」

「 じやあ見合つて相手つて 煉？ 」

いや、もしかしたら違うかもだし ． ． ．

「 おじいちゃん ． ． ． その相手つて
暴走族の総長やつてる？ 」

「おお！－興味を持つたか。
たしかにやつとるぞ！」

可能性

「その暴走族の名前……わかる?」

たしが
・
・
・
海龍

はい決定

「ねえその総長の名前つて格煉？」

「なんじや、知り合いか？」

うん、まあ知り合い……だね。

「あ・・・まあ「煉と櫻は付き合つてますよ」

すつごいアッサリ言つちやつたけど . . .
柚木サン . . .

「おおーーー、そうだったのかーーー!?

丁度いい、煉くんを呼ぼうじゃないか」

えー！マジですか？！

ガラ

「竜樹～！！来たぞ～」

・ いせだ。

「柚木、逃げよつ。今すぐ」

「む、無理だよ。・・・・・

もう屋敷の中に入つてきてる」

「『めんね』」

パタリと柚木の膝の上に倒れた。

「頭、終さんがこらしゃつてます」

「通せ」

1
はい

ガラツ

りんちゃん

あ う う う
・ ・ ・ ・

柚木に抱きついて顔を隠した。

すみません 秋良さん

「相変わらずゆず坊にベツタリだなあ」

うるさあーーいー！顔あわせたくないんですーー！

「おい・・・」

え？ 幻聴？ 幻聴だよね？ ？

「懷」

「 懐ちゃんを呼び捨てにするなー！」

幻聴じゃないよつです。

「れ、煉……！」

パツと顔をあげると、そこにはあからさまに不機嫌な煉様が

「な、なんでキレキレのやつでしょ。」

「あ
”あ
”
？」

ヒイイイイ！――！――！

怒つてゐるよ――！なんで！？Why！？

「はいはいわかつたから怒らないでよ」

柚木！――何がわかつたの！？

「わあつ！――？

「つと・・・危ねえな」

わわわ――！――投げるなよ――！――

しかも不機嫌總長様のとこ――！――！

「ボソソ・・・お前安藤といちゃつてんじや
ねえよ」

ビックウ！――！――！

み、耳元で喋るなあああ――！――！――！
前も言わなかつたつけ！？
てかイチャついてないし――！

「降ろして！」「

「無理」

「つお願い！！」

「無理」

何がだー！！！！！

「煉つ・・・おね」「まあまあ」

「そうじゃな

「やつなんですよ。もつ俺らも呆れるべりー

「柚木ーー！便乗しないでえーー！」

「もう分かつてるとと思うがお二人さんには
高校を卒業後結婚してもらいたい。
様子を見てればラブラブだしいな」

「あきちゃん様子で決めちゃうーー?
てか結婚てーーー！」

「じゃ、わしらは大広間にあるからな。
慎、煉くんに屋敷を案内してやれ。
じゃあ仲良くのーー」

ガラガラ　・　ピシャン

「　・　・　・　・。」

「　・　・　・　・。」

「　・　・　案内するよ」

「お前の部屋見たい」

私の部屋?別にこいナビ . . .

「なんもなによ?」

「いー」

つて事で部屋にきた けビ。

「煉 ?離してトセー

「嫌」

「おねがつ んんツ ふあ 」

「その顔 ヤベH」

「ちよつ れ、ん 」

入つて座ると「ないんでもビットで座るとい
押し倒されいやつた。的な。

「んやシ やぬ 」

「なんで?」

「ほい、おじこちゃんもいぬし . . .
おやぢやんだって . . . ハ . . .

「それにすんな」

氣にします――――――――

「だ、駄目だつてば・・・!」

「俺とすんの嫌？」

き、ききき聞くなー！……！
それになんか可愛いしつ

「ち、違うけど……うん!?」

「なら問題無い」

あります！！！

ツガン

「いつてえ . . .」

「わわわ」めんねつ . . . 大丈夫！？」

おもいッきり突き飛ばしちゃつたあ！－

「まつ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ねえつてば・・・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・

「いわんね・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・

「つむやこ、か・・・・

「あそうだよね。けあひつてるの・・・・・・・・・・・・・・

嫌がつけたもんね・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・

自分が悪いことわかつてゐるけど・・・・
でも詰詰まれるのほ辛いんだよ。

「ふえ . . . シラ . . . 」

外に出て、敷地内にある離れにきた。
ココに入るには鍵が必要で、
持つてるのは柚木と萩ちゃんと私だけ。

「ツ . . . フ . . . 」

ガチャ

「ほえ . . . ？」

誰？開いたつて事は柚木か萩ちゃん . . . ？

「つたぐ . . . 急にいなくなんじやねえよ」

「なんでつ . . . ！？煉 . . . ！？」

扉の鍵は閉めたはずだし . . .

「安藤に鍵渡された . . . 」

「柚木…………なにしてるの……」

「お前が嫌ならやさねえよ

「ナウジヤナニのツ……」

「煉が嫌なんじゃなくて……その……」

「言つて聞いてるか…………ね」

「は、初めてだから…………ちょっと怖いだけ……」

「う…………めんどくさいみな…………」

「処女とかさ…………」

「ばーが知つてる

「んッ…………」

優しくキスして抱き締められた。

「今はやんねえけど、あんま煽ると…………」

「わかんねえぞ

「あ、煽つてないし……！」

てゆかね、ここの体勢どうにかしよ。
煉の膝に向き合つて座つてゐる。

顔が近い！近い！

「顔、赤いな」

「！…ゆ、柚木達のとこ行こつ
ご飯出来る頃だしね…！」

立ち上がろうとしたけど抑えられ……失敗。

「れ、
煉？
」

「あ？ んだよ

「降ろしてくれると嬉しいなあ ・・・」

「嫌」

煉にお姫様抱っこされるしまつ・・・

「いくんだろ」

「そうですけど

「じゃあ別にいいだろ」

「よくないいいいい！」

些細な抵抗も虚しくそのまま連れてかれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2963r/>

蝶姫

2011年7月9日12時27分発行